

# 清華簡『子犯子餘』譯注

小寺 敦

## 關係論著と略記一覧

〔『子犯子餘』專論〕

圖版：「《子犯子餘》圖版」（清華大學出土文獻研究與保護中心編 李學勤主編

『清華大學藏戰國竹簡』（柒），中西書局，上海，2017年4月）

整理者：陳穎飛負責「《子犯子餘》釋文・注釋」（清華大學出土文獻研究與保護中心編 李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡』（柒），中西書局，上海，2017年4月）

難言 2017：「清華七《子犯子餘》初讀」（簡帛網 簡帛論壇，2017年4月13日）

清華大學出土文獻讀書會 2017：清華大學出土文獻讀書會 石小力整理「清華七整理報告補正」（清華大學出土文獻研究與保護中心，2017年4月23日）

程浩 2017：「清華簡第七輯整理報告拾遺」（清華大學出土文獻研究與保護中心，2017年4月23日，『出土文獻』第十輯，中西書局，上海，2017年4月）

召同 2017：召同（趙嘉仁）「讀清華簡（七）散札（草稿）」（復旦大學出土文獻與古文字研究中心 學術討論，2017年4月24日）

陳偉 2017a：「清華簡七《子犯子餘》“天禮悔禍”小識」（簡帛網，2017年4月

25 日)

程燕 2017:「清華七割記三則」(簡帛網, 2017 年 4 月 26 日)

王寧 2017a:「釋楚簡文字中讀爲“上”的“嘗”」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心, 2017 年 4 月 27 日)

陳偉 2017b:「也說楚簡從“𠂔”之字」(簡帛網, 2017 年 4 月 29 日)

陳治軍 2017:「清華簡《趙簡子》中從“𠂔”字釋例」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心, 2017 年 4 月 29 日)

陳偉 2017c:「清華七《子犯子餘》校讀」(簡帛網, 2017 年 4 月 30 日)

趙平安 2017a:「清華簡第七輯字詞補釋(五則)」(『出土文獻』第十輯, 中西書局, 上海, 2017 年 4 月)

陳偉 2017d:「清華七《子犯子餘》校讀(續)」(簡帛網, 2017 年 5 月 1 日)

劉釗 2017:「利用清華簡《柒》校正古書一則」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心, 2017 年 5 月 1 日)

王寧 2017b:「清華簡七《子犯子餘》文字釋讀二則」(簡帛網, 2017 年 5 月 3 日)

林少平 2017a:「清華簡所見成湯“网開三面”典故」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心, 2017 年 5 月 3 日)

王寧 2017c:「釋清華簡七《子犯子餘》中的“𠂔籀”」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心, 2017 年 5 月 4 日)

馮勝君 2017:「清華簡《子犯子餘》篇“不忤”解」(簡帛網, 2017 年 5 月 5 日)

許文獻 2017:「清華七《趙簡子》從𠂔二例釋讀小議」(簡帛網, 2017 年 5 月 7 日)

林少平 2017b:「也說清華簡《趙簡子》從“𠂔”字」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心, 2017 年 5 月 10 日)

孟躍龍 2017:「《清華七》“𣎵(桎)”字試釋」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心, 2017 年 5 月 11 日)

翁倩 2017：「清華簡（柒）《子犯子餘》篇札記一則」（簡帛網，2017年5月20日）

蕭旭 2017a：「清華簡（七）《子犯子餘》“弱寺”解詁」（復旦大學出土文獻與古文字研究中心，2017年5月23日）

陶金 2017：「清華簡七《子犯子餘》“人面”試解」（簡帛網，2017年5月26日）

蕭旭 2017b：「清華簡（七）校補（一）」（復旦大學出土文獻與古文字研究中心，2017年5月27日）

陳穎飛 2017：「論清華簡《子犯子餘》的幾個問題」（『文物』2017-6，北京，2017年6月）

趙平安 2017b：「試說“迺”的一種異體字及其來源」（『安徽大學學報』（哲學社會科學版），合肥，2017年9月）

子居 2017：「清華簡七《子犯子餘》韻釋」（個人圖書館先秦史，2017年10月28日，[http://www.360doc.com/content/17/1028/17/34614342\\_698857205.shtml](http://www.360doc.com/content/17/1028/17/34614342_698857205.shtml)）

伊諾 2018：「清華柒《子犯子餘》集釋」（復旦大學出土文獻與古文字研究中心，2018年1月18日）

段雅麗 2018：「清華簡《子犯子餘》與《孟子》“民心”“天命”思想比較」（『宜賓學院學報』2018-2，宜賓（四川省），2018年2月）

#### [[『子犯子餘』に關連する研究]

裴學海 1954：『古書虛字集釋』（中華書局，北京，1954年10月）

胡厚宣 1980：「殷代的冰雹」（『史學月刊』1980-3，開封，1980年3月）

高亨 1989：高亨纂著，董治安整理『古字通假會典』（齊魯書社，濟南，1989年7月）

楊伯峻 1990：『春秋左傳注』（修訂本，中華書局，北京，1990年5月）

李零 1996：「古文字雜識（兩篇）」（『于省吾教授百年誕辰紀念文集』，吉林大學

東洋文化研究所紀要 第 177 冊

出版社，長春，1996 年 9 月)

張儒·劉毓慶 2001：『漢字通用聲素研究』（山西古籍出版社，太原，2001 年 12 月)

宗福邦 2003：宗福邦·陳世鏡·蕭海波主編『故訓匯纂』（商務印書館，北京，2003 年 7 月)

徐在國 2006：『傳抄古文字編』（綫裝書局，北京，2006 年 11 月)

單育辰 2008：「談戰國文字中的「𠂔」」（『簡帛』第三輯，上海古籍出版社，上海，2008 年 10 月）21-28 頁

季旭昇 2009：「從戰國文字中的「𠂔」字談詩經中「之」字誤為「止」字的現象」（復旦大學出土文獻與古文字研究中心，2009 年 3 月 21 日)

張崇禮 2012：「釋金文中的“𠂔”字」（復旦大學出土文獻與古文字研究中心，2012 年 5 月 28 日)

沈培 2013：「清華簡和上博簡“就”字用法合證」（簡帛網，2013 年 1 月 6 日)

鄒可晶 2013：「《上博九·舉王治天下》“文王訪之於尚父舉治”篇編連小議」（簡帛網，2013 年 1 月 11 日)

陳治軍 2015：「釋“圣朱”及從圣的字」（安徽大學漢字發展與應用研究中心編『漢語言文字研究』第一輯，上海古籍出版社，上海，2015 年 2 月)

沈培 2015：「從清華簡和上博簡看“就”字的早期用法」（『源遠流長——漢字國際學術研討會暨 AEARU 第三屆漢字研討會』，北京大學，2015 年)

劉洪濤 2016：「《釋“蠅”及相關諸字》補證」（復旦大學出土文獻與古文字研究中心，2016 年 5 月 22 日)

單育辰 2016：「由清華四《別卦》談上博四《東大王泊旱》的“𠂔”字」（『古文字研究』31，中華書局，北京，2016 年 6 月)

宮島和也 2017：宮島和也「清華大學藏戰國竹簡（柒）『趙簡子』譯注」（『中国出土資料研究』22，東京，2018 年 7 月)

小寺敦 2019：小寺敦「清華簡『鄭武夫人規孺子』譯注」（『東洋文化』99，東

京，2019年3月)

小寺敦 2016b：小寺敦「清華簡『繫年』譯注・解題」（『東京大學東洋文化研究所紀要』170，東京，2016年12月）

小寺敦 2019：小寺敦「楚からみた晋—清華簡『子犯子余』を起点として—」（『日本秦漢史研究』20，京都，2019年11月）

[金文・簡牘著録類]

通釋：白川靜『金文通釋』（『白鶴美術館誌』1～56，神戸，1962年8月～1984年3月）

集成：中國社會科學院考古研究所編『殷周金文集成』（文物出版社，北京，1984～1994年）

金文編：容庚編著 張振林・馬國權摹補『金文編』（中華書局，北京，1985年7月）

近出：劉雨・盧岩編著『近出殷周金文集録』（中華書局，北京，2002年9月）

上博楚簡四：馬承源編『上海博物館藏戰國楚竹書』（四）（上海古籍出版社，上海，2004年12月）

清華大學出土文獻研究與保護中心編 李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡』（壹）（中西書局，上海，2010年12月）

清華大學出土文獻研究與保護中心編 李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡』（貳）（中西書局，上海，2011年12月）

清華大學出土文獻研究與保護中心編 李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡』（參）（中西書局，上海，2012年12月）

清華大學出土文獻研究與保護中心編 李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡』（肆）（中西書局，上海，2013年12月）

清華大學出土文獻研究與保護中心編 李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡』（伍）（中西書局，上海，2015年4月）

清華大學出土文獻研究與保護中心編 李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡』

(陸) (中西書局, 上海, 2016年4月)

[『鄭武夫人規孺子』研究に關連するインターネット上の主要サイト]

※簡帛網……<http://www.bsm.org.cn/>

復旦大學出土文獻與古文字研究中心……<http://www.gwz.fudan.edu.cn/>

清華大學出土文獻研究與保護中心……<http://www.ctwx.tsinghua.edu.cn/>

[全體に關する注]

(1) 正式な科學的發掘を経ないで發見された「非發掘簡」の利用やインターネット上の掲示板の書き込みや學會報告に關する引用については、小寺敦2019: 128 參照。

(2) 2019年9月28日の東京大学東洋文化研究所における研究會にて著者は本譯注に關わる報告を行い、出席者の方々から極めて有益なご意見をいただいた。一部を除き特にご教示の出所を示さなかったが、そのことは本稿に反映されている。

[清華簡『晉文公入於晉』譯注]

[釋文]

[公子橢(重)] 耳自楚近(適)秦【1】，尻(處)女(焉)。三戢(歲) ■【2】，秦公乃訥(召)子駹(犯)而蠶(問)女(焉) ■【3】，曰，「子若公子之良庶子 ■【4】，耆(胡)晉邦又(有)禍(禍)【5】，公子不能舛(持)女(焉) ■【6】，而(以上，第1號簡)走去之，母(母)乃猷心是不政(足)也虐(乎) ■【7】。」子駹(犯)倉(答)曰，「誠女(如)室(主)君之言 ■。虐(吾)室(主)好定(正)而敬訐(信)【8】，不秉禍(禍)利【9】身，不忍人【10】。古(故)走去之(以上，第2號簡)，以即(節)中於天【11】。室

(主) 女 (如) 曰疾利, 女 (焉) 不跲 (足) 【12】。誠我室 (主), 古 (故) 弗乘 ■ 【13】。」

省 (少) 公乃訥 (召) 子余 (餘) 而籲 (問) 女 (焉) 【14】。曰, 「子若公子之良庶子 ■, 晉邦又 (有) 禍 (禍), 公 (以上, 第3號簡) [子不能] 岸 (止) 女 (焉) 【15】。而走去之, 母 (母) 乃無良右 (左) 右也虐 (乎)。」子余 (餘) 倉 (答) 曰, 「誠女 (如) 室 (主) 之言 ■。虐 (吾) 室 (主) 之式 (二) 晶 (三) 臣, 不閑 (駁) 良誥 (規) 【16】。不諫 (敝) 又 (有) 善 【17】。必出又 (有) (以上, 第4號簡) [惡] 【18】。□□於難, 瞿 (謬, 懋) 輻 (留) 於志 【19】。幸旻 (得) 又 (有) 利不忤蜀 (獨) ■ 【20】。欲皆僉之 ■ 【21】。事 (使) 又 (有) 訛 (過) 女 (焉) 【22】。不忤以人 【23】。必身塵 (擅) 之 ■ 【24】。虐 (吾) 室 (主) 弱寺 (時) 而彊 (強) 志 【25】。不 (以上, 第5號簡) [秉禍利] 寡 (顧) 監於訛 (過) 【26】。而走去之。室 (主) 女 (如) 此胃 (謂) 無良右 (左) 右, 誠毆 (繫) 蜀 (獨) 忤 (其) 志 ■ 【27】。」

公乃訥 (召) 子犯 (犯) · 子余 (餘) 曰, 「二子事公子, 句 (苟) 隸 (盡) 又 (有) (以上, 第6號簡) 心女 (如) 是, 天豐 (豈) 慝 (謀) 禍 (禍) 於公子 ■ 【28】。」乃各賜之鑕 (劍) 緝 (帶) 衣常 (裳) 而散 (膳) 之 【29】。思 (使) 還 ■°

公乃籲 (問) 於邗 (蹇) 咎 (叔) 曰 【30】。 「夫公子之不能居晉邦, 訐 (信) 天 (以上, 第7號簡) 命哉。割 (曷) 又 (有) 僂 (僕) 若是而不果以或 (國) 【31】。民心訐 (信) 難成也哉 ■。」邗 (蹇) 咎 (叔) 倉 (答) 曰, 「訐 (信) 難成 ■, 毆 (抑) 或易成也 【32】。凡民秉戠 (度) 端 (端) 正 · 譖 (僭) 訕 (忒) 【33】。才 (在) 上 之 (以上, 第8號簡) 人, 上 綱 (繩) 不 達 (失) 【34】。斤亦不遭 (僭) ■ 【35】。」公乃籲 (問) 於邗 (蹇) 咎 (叔) 曰, 「咎 (叔), 昔之舊聖折 (哲) 人之博 (敷) 政命 (令) 荆 (刑) 罰 【36】。事 (使) 衆若事 (使) 一人, 不穀 (穀) 余敢籲 (問) 忤 (其) (以上, 第9號簡) 道系 (奚) 女 (如)。猷 (猶) 咎 (叔) 是籲 (聞) 遺老之言 【37】。必尚 (當) 語我

才(哉)。盍(寧)孤是勿能用【38】。卑(譬)若從驪(雉)狀(然)【39】，虐(吾)尚(當)觀(其)風■【40】。」邗(蹇)咎(叔)倉(答)曰，「凡君齋■(之所)籲(問)(以上，第10號簡)莫可籲(聞)■。昔者成湯以神事山川【41】，以惠(德)和民【42】。四方亾(夷)莫(貊)句(後)【43】與人面，見湯【44】若鸞(逢)雨，方奔之而麇(比)雁(應)女(焉)【45】，用果念(咸)政(正)(以上，第11號簡)九州而囂(遍)君之【46】。遂(後)殪(世)稟(到)受(紂)之身【47】，殺三無咎(辜)【48】，爲爇(炮)爲烙【49】，殺某(胚)之女【50】，爲桀(桎)桀(桎)三百【51】。暨(殷)邦之君子，無少(小)大，無遠逐(迹)【52】，見(以上，第12號簡)受(紂)若大隍(岸)牂(將)具(俱)隕(崩)【53】，方走去之，愚(懼)不死型(刑)以及于卑(厥)身【54】，邦乃述(遂)崑(亡)■【55】。用凡君所籲(問)莫可籲(聞)■。」

公子種(重)耳籲(問)於邗(蹇)咎(叔)曰，「崑(亡)(以上，第13號簡)[人]不孫(遜)【56】，敢大膽(膽)籲(問)，天下之君子，欲起(起)邦系(奚)以【57】。欲亡邦系(奚)以。」邗(蹇)咎(叔)倉(答)曰，「女(如)欲起(起)邦，則大甲與盤庚・文王・武王【58】，女(如)欲(以上，第14號簡)亡邦，則燂(桀)及受(紂)・刺(厲)王・幽王，亦備才(在)公子之心已(已)【59】，系(奚)桀(勞)籲(問)女(焉)。」■(以上，第15號簡)子犯(犯)子余(餘)(以上，第1號簡背)

### [訓讀文]

公子種(重)耳楚自り秦に迄(適)き，女(焉)に尻(處)る。三載(歳)にして，秦公乃ち子犯(犯)を討(召)して女(焉)に籲(問)ひて曰く，「子若し公子の良庶子ならば，考(胡)ぞ晉邦禍(禍)ひ又(有)りて，公子女(焉)を舁(持)つこと能はざらんや，而して走りて之を去るは，乃ち猷心是れ跽(足)らざること母(母)からんか。」と。子犯(犯)倉(答)へ



て曰く、「誠に室（主）君の言の女（如）し。虜（吾）が室（主）定（正）を好みて訐（信）を敬ひ、禍（禍）ひを乗りて身を利せず、人に忍びず。古（故）に走りて之を去りて、以て天に即（節）中す。室（主）女（如）し疾利を曰はば、女（焉）ち敗（足）らざらん。誠に我が室（主）なれば、古（故）に乘らず。」と。

省（少）くして公乃ち子余（餘）を訥（召）して女（焉）に籲（問）ひて曰く、「子若し公子の良庶子ならば、晉邦禍（禍）ひ又（有）りて、公子女（焉）を昇（止）むること能はずして、而して走りて之を去るは、乃ち良き右（左）右無きこと母（母）からんか。」と。子余（餘）倉（答）へて曰く、「誠に室（主）の言の女（如）し。虜（吾）が室（主）の式（二）晶（三）臣、良誥（規）を聞（駁）めず、善又（有）るを誦（敝）らず、必ず〔惡〕又（有）るを出し、難に□□、瞿（譌、懋）として志に輻（留）む。幸ひにして利又（有）るを旻（得）ば蜀（獨）りするを忻ばず、皆之を僉じくせんと欲す。訛（過）ち又（有）ら事（使）めば、人に以ぶを忻ばず、必ず身之を塵（撞）にす。虜（吾）が室（主）弱寺（時）にして彊（強）志あり、〔禍利を乗ら〕ず、訛（過）ちを募（顧）監して、而して走りて之を去る。室（主）女（如）し此れ良き右（左）右無しと冒（謂）はば、誠に毆（繫）れ汧（其）の志を蜀（獨）りにす。」と。

公乃ち子軋（犯）・子余（餘）を訥（召）して曰く、「二子公子に事へて、句（苟、まこと）に聿（盡）く心是の女（如）く又（有）らば、天豊（豈）に禍（禍）ひを公子に慝（謀）らんや。」と。乃ち各之に鑱（劍）緝（帶）衣裳（裳）を賜ひて之に散（善）くして、還ら思（使）む。

公乃ち邗（蹇）胥（叔）に籲（問）ひて曰く、「夫れ公子の晉邦に居ること能はざるは、訐（信）に天命なるかな。割（曷）ぞ僇（僕）是の若き又（有）りて以て戡（國）あるを果たさざる、民心訐（信）に成し難きなるかな。」と。邗（蹇）胥（叔）倉（答）へて曰く、「訐（信）に成し難けれども、毆

(抑) 或ひは成し易きなり。凡そ民庀(度)を乗るに端(端)正・譖(僭)訃(忒)は、上の人に才(在)り、上の綱(繩)達(失)せずば、斤も亦た遭(僭、こ)えず。」と。公乃ち邗(蹇)咎(叔)に鬲(問)ひて曰く、「咎(叔)よ、昔の舊聖折(哲)人の政命(令)荆(刑)罰を博(敷)くや、衆をして一人を事(使)ふが若くせ事(使)むるに、不穀(穀)余敢へて元(其)の道を鬲(問)ふは系(奚)女(如)。猷(猶)ほ咎(叔)是れ遺老の言を鬲(聞)くがごとく、必ず尚(當)に我に語げんかな。寧(寧)くんぞ孤是れ能く用ふること勿からん。卑(譬)ふれば驪(雉)に従ふが若く狀(然)り、虐(吾)尚(當)に元(其)の風を觀んとす。」と。邗(蹇)咎(叔)倉(答)へて曰く、「凡そ君の鬲(問)ふ所鬲(聞)く可きこと莫し。昔者成湯神を以て山川に事へ、惠(德)を以て民に和す。四方の巨(夷)(貊)句(後)に人と面し、湯に見ゆること鸞(逢)雨の若く、方に之に奔りて麕(比)雁(應)し、用て果して九州を念(咸)政(定)めて曹(遍)く之を君とす。遂(後)殪(世)受(紂)の身に梟(到)り、三無姑(辜)を殺し、燿(炮)を爲し烙を爲し、某(胚)するの女を殺し、桀(桎)桀(枯)三百を爲す。鑿(殷)邦の君子、少(小)大無く、遠逐(迹)無く、受(紂)を見ること大陞(岸)の駟(將)に具(俱)に墮(崩)るるが若く、方に走りて之を去り、死せずして型(刑)の以て罕(厥)の身に及ばんことを慄(懼)るれば、邦乃ち述(遂)に崑(亡)ぶ。用て凡そ君の鬲(問)ふ所鬲(聞)く可きこと莫し。」と。

公子種(重)耳邗(蹇)咎(叔)に鬲(問)ひて曰く、「崑(亡)[人]不孫(遜)にして、敢へて大膽(膽)に鬲(問)はん、天下の君子、邦を迨(起)こさんと欲さば系(奚)を以てせんか。邦を亡ぼさんと欲さば系(奚)を以てせんか。」と。邗(蹇)咎(叔)倉(答)へて曰く、「女(如)し邦を迨(起)こさんと欲さば、大甲と盤庚・文王・武王とに則り、女(如)し邦を亡ぼさんと欲さば、桀(桀)と受(紂)・剌(厲)王・幽王とに則るべく、亦た備はりて公子の心に才(在)る已(已、のみ)、系(奚)ぞ装(勞)して女(焉)を

馮（問）はん。」と。

子犯（犯）子餘（餘）

[現代語譯]

公子重耳が楚から秦に行き、そこにいた。三年経つと秦公が子犯を呼んで尋ねて言うよう、「あなたがもし公子の良き庶子（という官職）にあるならば、どうして晉の國に禍いがあり、公子がそれ（晉國）を保つことができなかったのでしょうか、かえって晉から逃走したのは、はかりごとが不足していたのではなかったのでしょうか。」と。子犯は答えて言うには、「確かにご主君（＝秦公）の仰る通りです。我が主君は正しきことを好んで信義を敬い、禍に乗じて利益を得ず、人に残忍なことをしません。だからそこから去り、天に對して適切なところを選んだのです。主君がもし悪い利得のことを言えば（はかりごと）が不足だったでしょう。誠に我が主君だから（その利得を）取らなかったのです。」と。

しばらくしてから公は子餘を呼んで問うて言うよう、「そなたがもし公子の良き庶子の官職にあるならば、晉國に災いがあつて、公子がそれを止めることができず、かえって晉から逃走したのは、良い側近がいなかったからではないのか。」と。子餘が答えて言うには、「誠にご主君のお言葉の通りです。我が主君の二三臣は、良き規範を止めず、善あるところを覆わず、必ず悪あるところを取り去り、……難儀において……、努めて志を守るのです。幸いにして利得があれば、一人占めにすることを喜ばず、皆とその利益を同じくしようと望んでおります。もし誤りがあれば、他人に責任を押しつけず、必ず自らの一身に引き受けます。我が主君は悪い時の巡り合わせであっても強い志を持ち、禍から生じた利を取らず、過誤をかえりみて、そこから去ったのです。我が主君にもし良い側近がいないと仰るのですしたら、まことに（我が主君は）その志を一人だけで保っていたことでしょう。」と。

(秦)公はそこで子犯・子餘を呼んで言うには、「お二人は公子に事えて、本當に全て心を合わせる事がそのようであるならば、天はどうして災厄を公子に下そうとするだろうか。」と。そこで皆に劍帶衣裳を與えて親密にもてなし、歸らせた。

それから(秦)公は蹇叔に尋ねて言うよう、「公子が晉國にとどまれないのは、まことに天命であることよ。どうしてこのような家臣がいながら國を保つことができないのか、民の心(を掌握すること)は本當に成就しにくいものであることだ。」と。蹇叔が答えて言うには、「本當に成就しにくいものではありませんが、また成就しやすいものでもあります。そもそも民が法制に従うにあたり、正道にあるか常軌から外れるかは、上位者の責任であり、上位者の繩(にあたる規範)が失われることがなければ、斤(にあたる執行)も誤ることはあり得ないのです。」と。それから(穆)公は蹇叔に尋ねて言うには、「叔よ、昔の舊聖・哲人は政令・刑罰を發布するにあたり、民衆をあたかも一人(の人間)のように使役させたが、私とその道を尋ねるのはどうであろうか。遺老の言葉を聞くように、そなたが私に告げてくれることであろうよ。どうして私が用いることができないことがあろうか。例えば雉を追いかけるようなもので、私はその風氣を觀察しなければならぬのだ。」と。蹇叔が答えて言うには、「そもそもご主君のお尋ねになることには、聞くべきことはありません。昔、成湯は神によって山川にお事えし、徳によって民に和同しました。四方の夷貊はその後で人と共に面會し、湯に拝謁すること雨が降るようであり、これに急ぎ走って並び調和し、そしてついに九州をみな安定させてあまねくこれらの君となったのです。後になって紂の世に至り、三人の無實の者を殺し、炮烙の刑を行い、身ごもっている女を殺し、手枷足枷を三百人にはめました。殷國の君子は、大小・遠近にかかわらず、大きな岸がことごとく崩壊しようとするかのように紂を見て、たちどころにそこから去って、死なずに刑罰がその身に及ぶことを恐れたので、國はとうとう亡びました。だからご主君のお尋ねになること

に聞くべきことはありません。」と。

公子重耳が蹇叔に尋ねて言うよう、「亡命者である私は不遜であります、思い切ってお尋ねします。天下の君子が國を起こそうとするにはどうすればよろしいでしょうか。國を亡ぼそうとするにはどうすればよろしいでしょうか。」と。蹇叔は答えて言うには、「もし國を起こそうとするならば、大甲・盤庚・文王・武王を手本とし、もし國を亡ぼすならば、桀・紂・厲王・幽王を手本とされればよろしく、また公子の心にも備わっているはずで、どうしてわざわざお尋ねになることがありましょうか。」と。

子犯子餘

[注]

【1】冒頭三字の缺字について。整理者は下文より、「公子禴（重）」を補う。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は、簡 2 は 41、簡 3 は 42、簡 7 は 41、簡 8 は 42、簡 9 は 41、簡 10 は 40、簡 11 は 40、簡 12 は 41、簡 13 は 42 字で、40 から 42 字の間にあり、簡 1 は 39 字だから、更に 3 字を加えて 42 字まで許容されるとする。

伊諾 2018 は整理者に従う。

筆者注：簡 1 の最初の字が「耳」であるから、文脈上、公子重耳のことをいうはずであり、ここは本文でも「公子禴（重）」を補っておく。

「近」について。整理者はこれを「𨾏」と読み、『淮南子』原道「自無𨾏有」、高誘注「𨾏、適也。」を引用する。

子居 2017 は上博楚簡四の『昭王毀室』で整理者の陳佩芬がこの字を「適」に読むことを指摘し、ここは「𨾏」を介さず直接「適」に読む。

伊諾 2018 は子居 2017 に従う。

筆者注：上博楚簡四『昭王毀室』で陳佩芬はこれを𨾏に従う石聲で「𨾏」の

異文であり、『集韻』「𨔵、行也。」「適、往也。」を引用し、あるいは「適」に読む。ここは子居 2017 に従う。

「𨔵(重)耳」について。整理者は次のように解説する。これは晉獻公の子で、後に入國して覇を稱え、晉文公と稱せられ、齊桓公と「齊桓晉文」と並び稱された。驪姫の亂後、重耳は亡命すること 19 年、『左傳』によれば楚から秦に行ったのが僖公二十三(前 637)年である。『史記』晉世家に「居楚數月、而晉太子圉亡秦，秦怨之。聞重耳在楚，乃召之。」

【2】「𨔵」について。整理者はこれを「處」に読む。

難言 2017 の羅小虎(羅濤)はこれを如字に読む。

筆者注：ここは整理者に従う。

「女」について。整理者はこれを「焉」と読み、指示代名詞とし、裴學海 1954: 96(中華書局 2004 年版)「之也。」を引用する。

「三戕」について。整理者は、重耳が秦にいた時間は、『左傳』『史記』晉世家・秦本紀などによれば 2 年であり、簡文の「三年」と合わないとする。

子居 2017 は、清華簡『繫年』における重耳の入秦を魯僖公二十二年秋、その晉侯即位を同二十四年として、ここは『韓非子』などの記述に合うと述べる。

伊諾 2018 は子居 2017 に従う。

「𨔵女三戕」について。整理者は句讀を「……，處焉三歲。……」とする。

難言 2017 の暮四郎(黃傑)は、「……，處焉。三歲，……」に區切る。

難言 2017 の羅小虎(羅濤)は傳世文獻に「居+場所+時間」の例が多く見え、それが文の先頭にくることが少なくないことから、ここを「……。居焉三

歳，……」に區切る。また墨點が必ずしも一文の區切りに用いられていないこともいう。

子居 2017 はここを「……居焉，三歳，……」に區切る。

伊諾 2018 は子居 2017 に従う。

筆者注：墨點について。暮四郎のいうように「三歳」の前を句點にして文を切った方が文意が通りやすい。なおこれ以降，語句の切れ目と覺しき箇所にも墨點があり，篇末にはより大きなそれがある。整理者の釋文ではそれらは示されていないが，ここでは本文に記しておく。また羅小虎が指摘するように，墨點と一文の區切りは必ずしも對應していない。これは本篇の讀者が讀解の目安につけたものだろうか。

【3】「秦公」について。整理者は次のように述べる。これは秦穆公で，名は任好，在位 39 年（前 659- 前 621）である。秦穆公二十三（前 637）年，晉の公子重耳を迎え，翌年，國に送り歸して君主とした。

「訢」について。整理者は「召」と讀む。

「子軫」について。整理者は次のようにいう。これは子犯編鐘（近出 10-25）の器主名の書寫法と同じである。「子犯」は字で，名は偃，孤氏，狐突の子，重耳の舅であり，だから「舅犯」「咎犯」と稱され，重耳の流亡から入國後の稱霸において，常に重要な役割を果たした。『韓非子』外儲說右上に文公「一舉而八有功。所以然者，無他故異物，從孤偃之謀。」『呂氏春秋』不廣に「文公可謂智矣……出亡十七年，反國四年而霸，其聽皆如咎犯者邪。」とある。子犯編鐘は山西聞喜の某墓より出土したとされ，子犯はその附近に葬られたのかもしれない。

【4】「若」について。整理者は『國語』周語上「若能濟也」，韋昭注「猶乃也。」を引用する。

「公子之良庶子」について。整理者は「庶子」を官職名とし、『禮記』燕義「古者周天子之官有庶子官。庶子官職諸侯・卿・大夫・士之庶子之卒，掌其戒令，與其教治。」鄭注「庶子，猶諸子也。周禮諸子之官，司馬之屬也。」『書』康誥「矧惟外庶子，訓人。」を引用する。

陳偉 2017c は次のように述べる。子犯・子餘が「庶子」の職にあったことはなく、秦穆公は彼らとの會話中にずっと公子重耳のことを述べており、後に彼ら兩人と話した時によく彼らに好意を示す。よってここは彼らへの稱譽の言葉ではなく、この前後は「子，若公子之良庶子，」に作るのではないか。「子」は子犯・子餘への呼び掛けで、「若」は『史記』項羽本紀「吾翁即若翁。」のように代名詞である。「之」は「爲」であり、『經詞衍釋』卷九に「之」字條「之，猶爲也。『孟子』「欲其子之齊語。」言欲子爲齊語也。『賊仁者謂之賊。』『左傳』成二年「謂之君子而射之，非禮也。」凡言「謂之」，皆猶「謂爲」也。襄十三年「請諡之共。」言諡爲共也。『禮記』「其變而之吉祭也。」言而爲吉祭。」とある。重耳は晉獻公の庶子であり、「良庶子」とは恐らく秦穆公の彼に對する褒稱であろう。

子居 2017 は、重耳は流亡中でその臣下が官職にあったわけではなく、これは重耳の侍從を指し、北大簡『禹九策』にも「良庶子」が見え、本篇と『禹九策』の成書時期が近く、本篇のそれが戰國末期である證據だという。

伊諾 2018 は陳偉 2017c に従う。

筆者注：「庶子」を褒稱とするのはやはり文の構造上無理がある。史實かはともかく、本篇では子犯・子餘がその身分であったと考えて整理者の理解に従うのが無難であろうか。

【5】「者」について。整理者はこれを「胡」と読み、疑問又は反語を表すとする。

難言 2017 の紫竹道人（鄔可晶）は次のように述べる。ここで秦公が問いたいののは「猷心」が不足しているかどうかであり、「毋乃」からその詰問する語



氣が出てくる。「晉邦有禍，公子不能久待……」は事実を述べており，「晉邦有禍」の前に「胡」を加えて問いを起こすことはできない。簡3-4で秦穆公が子餘に問うた「子若公子之良庶子，晉邦有禍，公……止焉，而走去之，毋乃無良左右也乎。」と比較すればそれは明らかである。簡7にもこの種の發語詞「夫」があり，ここもそれだろう。清華簡『越公其事』などには，同じことを述べる文が異なる文字を用いる例がある。

難言 2017 の lht (劉洪濤) はこれを「故」に読み，過去・昔の意とし，この文字は長壽を意味する「胡」の專字で，簡文ではこの意味で「古」「夫」を用いないとする。

伊諾 2018 は紫竹道人に従う。

筆者注：ここは整理者の讀みに従いつつ，この後の「而」を境に，2つの疑問が並列されていると解しておく。

「晉邦又禍」について。整理者は驪姫の亂を指すといい，『國語』晉語二「殺大子申生」「盡逐羣公子，乃立奚齊焉」を引用する。

【6】「𡗗」について。整理者はこれを「𡗗」に従う之聲とし，同音の「止」に読み，『詩』玄鳥「維民所止」，鄭玄箋「止，猶居也。」を引用し，下文の蹇叔に問うた「公子之不能居晉邦」の意味と同じだという。

趙平安 2017a は，これは同篇に現れる「寺」字とは，字形・用法上明らかな區別があつて同一字ではなく，甲骨文の「置」字と同一であり，簡文の場合は「止」に訓ずるとし，『文選』嵇康「與山巨源絕交書」「足下若𡗗之不置」，呂向注「置，止也。」，『資治通鑑』周紀五「毋置之」，胡三省注「置，止也。」を引用し，簡文では「止外」の意の外，「棄置」「處置」にも理解できると述べる。

難言 2017 の xiaosong は，下文の子犯の回答により，これを「恃」に讀む可能性をいいつつ，「寺」の異體字ではないかとし，「不能恃焉，而走去之」の「焉」は晉國の禍亂を，「之」は晉國を指し，ここの文章は，重耳は禍に乗じて

自分の利益を得ることができず、逆に國を離れ去ったが、それはおよそあなた方の謀略が足りなかったということではないか、の意味とする。

難言 2017 の劉偉浠は、整理者が「止」と讀むのに従いつつ、「居」に訓ずるのは意味が通らないとし、停止・阻止の意に解するのではないかという、『廣韻』止韻「止，停也。」を引用し、この文章は、晉國に禍があり、それを阻止しないだけでなく、かえって晉國から逃れ去った、の意味とし、「胡……而」は呼應しているとする。

難言 2017 はこれは「待」にも讀め、宗福邦 2003 により「禦」に訓ずるといい、『管子』大匡「今若殺之，此鮑叔之友也，鮑叔因此以作難，君必不能待也，不如與之。」を引用する。

召同 2017 もこれを阻止・制止の意の「止」に讀む。

難言 2017 の明珍はこれは卅・之に従うが、止に従わず、「止」に讀むのはおかしく、「之」「止」が通用する例については季旭昇 2009 が述べており、これは「持」に讀むべきで、掌握・把握の意であり、次の「焉」は「禍」を指し、「持焉」と後文の「秉禍利身」の「秉禍」とは同じ意味で、ここは晉國に禍があって、重耳はその時機を掌握して利益を得ることができなかったことをいうとする。

難言 2017 の苦行僧はこれを「置」に讀み、甲骨文の「置」字は「臼」「之」に従い、この字と似たところがあるといい、「公子不能置焉」は重耳が太子に立てられることができなかったことをいうとする。

難言 2017 の張崇禮はこれを「丞」の形聲字とし、「之」を聲符として、ここは「拯」に讀み、救うの意とする。

難言 2017 の心包は、これは郭店楚簡『六德』簡 31「仁類柔而速，義類蒞而絶（又は「斷」），仁柔而猛，義剛而簡，……」の「蒞（置）」の異體字（陳劍は『六德』「剛」「強」「堅」の意味に近いとする）であり、自ら置くの省略、處の意と述べる。

子居 2017 はこれを「又」（もと手の形）「寺」に従う字で「持」に読み、「守」に訓じ、『國語』越語下「夫國家之事，有持盈，有定傾，有節事。」，韋昭注「持，守也。」などを引用する。

難言 2017 の王寧は、これは卅に従う出聲で、「持」の或體であり、古文の「持」の上旁は「出」で「手」や「寸」又は「支」が下旁であり、會意が同じであるといい、ここは把握・利用の意とする。そして徐在國 2006 序言に據りつつ、『集韻』に傳抄古文の「楷」を「棧」に作る例があり、それは杜從古が『集韻』の隸古定を根據として轉換した古文字形であり、この字は「持」かもしれない、古書で「𣎵」「式」に假借する字であり、『廣韻』に「楷，式也。」とあり、それは「義同或義近」なる借用で、傳抄古文にしばしば見られる現象であると述べる。

難言 2017 の林少平は王寧の「持」説に従う。

伊諾 2018 は明珍に従う。

筆者注：ここは明珍も指摘するように、後段の「不秉禍利」との對應からいえば、ここは「止」よりは「秉」ないしそれに近い意味にとるのが適當であろう。ひとまず「持」に読んでおく。

【7】「猷」について。整理者は圖謀の意とし、『爾雅』釋言「圖也。」、『爾雅』釋詁「謀也。」を引用し、西周後期・春秋金文で「猷」「心」が對稱され、大克鼎（集成 2836）「愬逸厥心，宇靜于猷。」，戎生鐘（近出 27）「啓厥明心，廣經其猷。」を引用する。

「是」について。整理者は如字に讀む。

難言 2017 の暮四郎（黃傑）は、これを「寔」に讀む。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は、『禮記』大學「人之有技，媚疾以惡之，人之彥聖，而違之俾不通，寔不能容。」を引用し、暮四郎に従う。また簡 10「猶叔是聞遺老之言」の「是」も同様だとする。

筆者注：ここで敢えて假借字をとる必要はなかろう。整理者に従っておく。

「母乃猷心是不跂也虐」について。整理者はこれを「母乃猷心是不足也乎」に讀む。

難言 2017 の ee (單育辰) はこれを「母乃猶心寔不足也乎」に讀み、簡3の「主如曰疾利焉不足。」とが對應するという。そして「猶」は助詞、やはりの意で、簡10「猷(猶)叔是(寔)聞遺老之言」の「猶」と位置・意味が一致すると述べる。

難言 2017 の羅小虎(羅濤)は、「猷心」を謀心、はかりごとをめぐらす思いの意として、ここは、あなたの策謀の思慮が不足していたからではないか、の意味とする。

子居 2017 は「猷」について ee に従い、やはり用心が足りなかった、晉の亂時に自身の權益を守ろうと力を盡くさなかった意とする。

伊諾 2018 は「猷」について整理者に従う。

筆者注：ここは整理者や羅小虎のように、はかりごとの意に捉えるのが文意にかなう。意味としては羅小虎の解釋がよい。

【8】「誠女」について。整理者は「誠如」に讀む。

子居 2017 は「誠如」「誠若」は戰國末期の傳世文獻以降に見え、またその後の「主君」は『史記』・『墨子』貴義・『戰國策』などに見られるように、戰國時代の表現だと述べる。

「定」について。整理者は『説文解字』「安也。」を引用し、ここは定身・安身を指すとし、『左傳』文公五年「犯而聚怨，不可以定身。」を示す。

難言 2017 の厚予はこれを「正」に讀み、「定」「正」の通假や「好正」は古書にしばしば見られるという。

召同 2017 は整理者を否定し、「定」は「正」を聲符とし、ここは「好正」に讀むとして、『管子』水地「宋之水，輕勁而清，故其民閑易而好正。」、『呂氏春秋』期賢「于是國人皆喜，相與誦之曰，吾君好正，段干木之敬。吾君好忠，段

干木之隆。』、『潛夫論』忠貴「然衰國危君繼踵不絕者，豈世無忠信正直之士哉。誠苦忠信正直之道不得行爾。」などを引用し、「正直」「忠信」に密接な関係があるとする。

子居 2017 は召同 2017 に従い、「好正」は後の「敬信」とともに戦國末期以降の表現とする。

伊諾 2018 は召同 2017 に従う。

筆者注：例えば、『老子』第二十二章「框則直。」の「直」を馬王堆帛書『老子』甲本は「定」に作り、乙本は「正」に作る。また『老子』第三十七章「無欲以靜，天下將自定。」の「定」を馬王堆帛書『老子』甲・乙本は「正」に作る（高享 1989: 60）。ここは文脈により、厚予のいうように「正」に読んでおく。

「敬訐」について。整理者はこれを「敬信」と読んで慎重で守信の意とし、『韓非子』飾邪「賞罰敬信」を引き、「好定」は品性、「敬信」は行爲を指すとして、『國語』晉語二「定身以行事謂之信。」を引用する。

【9】「秉」について。整理者は『逸周書』諡法「順也。』、『國語』晉語二「吾秉君以殺大子」，王引之『經義述聞』「吾順君之意以殺大子。」を引用する。

召同 2017 は整理者を否定して「稟」に読み、典籍で「秉」「稟」がしばしば通用すると述べる。

劉釗 2017 は整理者説に疑問を呈し、これを如字に読んで持つ意に解し、また「稟」にも読めるとして受け取る意ともする。

子居 2017 もこれを如字に読む。

伊諾 2018 は劉釗 2017 らに従う。

筆者注：ここは文脈により、劉釗 2017 に従って如字に読む。

「禍利」について。整理者はこれを「禍利」と読む。

召同 2017 はこれを禍（驪姫の亂）から生じた利とし、「不稟禍利」は公子重耳が晉國の亂がもたらした好機を受けず、禍に乗じて辨偽をはからない意味だとする。

劉釗 2017 は「禍利」は竝列關係にはなく、「禍」は「利」を修飾し、「不秉禍利」は禍のもたらした利益を持たない或いは受け取らない、の意味とする。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は召同 2017 に従う。

筆者注：ここは劉釗 2017 の解釋に従うことが文意にかなう。公子重耳が混亂につけこんで利益を得るような水準の低い人物ではないことが強調されている。

【10】「身」について。整理者はこれを自身のこととする。

「不忍人」について。整理者は『國語』晉語一「而大志重，又不忍人」，韋昭注「不忍施惡於人。」を引用する。

召同 2017 はこれを否定し、ここの「忍」は殘忍の意で、自分が殘忍なことをしない意味だとする。

「不秉禍（禍）利身不忍人」について。整理者は「不秉禍利，身不忍人」に區切る。

難言 2017 の紫竹道人（鄔可晶）は、ここの「秉禍利」は句をなさず、「不忍人」の前に「身」は必要なく、主語は「吾主」であるから、ここは「不秉禍利身，不忍人」に區切るべきで、「秉禍」「利身」は對であり、文章のおおよその意味は、我が主は既に禍に順って己を利することを願わず、また人に殘酷なことをするを願わず、だから國を去った、であるとする。

劉釗 2017 は次のように述べる。第一に、「秉禍」は典籍に見えず、「秉利」は『國語』呉語「……敢使下臣盡辭，唯天王秉利度義焉。」，清華簡『越公其事』第十一章「昔不穀先秉利於越，越公告孤請成，男女〔服〕……」に用例が

ある。第二に、簡文最後の「故弗秉」の「秉」と先の「不秉禍」は呼應し、否定詞「不」は「秉」にのみ對應する。もし整理者の區切りなら「不秉禍利身」の「利」が脱落してしまう。よって紫竹道人説の區切りの方が妥當である。「身不忍人」は意味が通じないことはない。『孟子』盡心下に「曾皙嗜羊棗，而曾子不忍食羊棗。公孫丑問曰，膾炙與羊棗孰美。」趙岐注に「羊棗，棗名也。曾子以父嗜羊棗，父沒之後，唯念其親不復食羊棗，故身不忍食也。」とある。また『越絶書』卷五請糴内傳第六に「於是乃卑身重禮，以素忠爲信，以請於吳。將與，申胥進諫曰，「不可。夫王與越也，接地鄰境，道徑通達，仇讎敵戰之邦，三江環之，其民無所移，非吳有越，越必有吳。且夫君王兼利而弗取，輸之粟與財，財去而凶來，凶來而民怨其上，是養寇而貧邦家也。」」とあり，この「兼利」は明らかに「秉利」の誤りである。それは「秉」「兼」の字形の近さと，典籍における「兼利」用例の多さによる。また『國語』越語下「三年，而吳人遣之。歸及至于國，王問于范蠡曰，「節事奈何。」對曰，「節事者與地。唯地能包萬物以爲一，其事不失。生萬物，容畜禽獸，然後受其名而兼其利。」」の「兼」も同様に「秉」の誤りかもしれない。

難言 2017 の易泉は文章の區切りを紫竹道人に従いつつ，「秉」は「及」の誤りではないかという，郭店楚簡『唐虞之道』簡 24 や『語叢二』簡 19 の「及」字のように，楚簡の「及」「秉」の筆法が近いことを述べ，『史記』項羽本紀「公徐行即免死，疾行則及禍。」を引用する。

子居 2017 も紫竹道人に従う。

伊諾 2018 は整理者の句讀に従いつつ，「忍」の解釋は紫竹道人に従う。

筆者注：ここは劉釗 2017 もいうように紫竹道人の句讀・解釋が適當。

末尾の句讀について。整理者は讀點にする。

筆者注：文脈上，ここは句點にしておく。

【11】「即」について。整理者はこれを「節」に讀み，『禮記』樂記「好惡無

節於内」，鄭注「節，法度也。」を引用する。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の馬楠はこれを如字に読み，「節」に読む必要はないとし，「就」に訓ずる。

子居 2017 は馬楠に従う。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は「即」は精母質部で，「冀」（精母脂部，脂質對轉）に読み，こいねがう意とする。

伊諾 2018 は馬楠に従う。

「即中」について。整理者はこれを折中の意とし，『楚辭』離騷「依前聖以節中兮」，『楚辭』惜誦「令五帝以折中兮」，朱熹『集注』「折中，謂事理有不同者，執其兩端而折其中，若《史記》所謂「六藝折中於夫子」是也」を引用する。

召同 2017 は「即」を「衷」に読み，「衷」は善，福佑の意として，『書』湯誥「惟皇上帝，降衷于下民。」，孔傳「衷，善也。」，『國語』吳語「今天降衷於吳，齊師受服。」「楚申包胥使于越，越王句踐問焉，曰，吳國爲不道，求殘我社稷宗廟，以爲平原，弗使血食。吾欲與之徹天之衷，唯是車馬・兵甲・卒伍既具，無以行之。」を引用し，ここの「即衷於天」は天に對して善に近づく意味で，公子重耳の「正直忠信」「不忍人」の人品に呼應するという。

子居 2017 は召同 2017 に従う。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は，「中」を適合・適應・對應の意とし，『論語』微子「言中倫，行中慮。」を引用し，「中於天」とは『禮記』祭義「合諸天道」，『呂氏春秋』孟秋紀懷寵「以除民之讎而順天之道也」の「順天之道」の意味に近いと述べる。

段雅麗 2018 は整理者の讀みに従いつつ，『孟子』公孫丑上「夫仁，天之尊爵也。」，離婁上「是故誠者，天之道也。」，告子上「有天爵者，有人爵者。仁義忠信，樂善不倦，此天爵也。公卿大夫，此人爵也。古人修其天爵，而人爵從



之。」を引用し、『孟子』における人の道德行爲の源としての「天」と簡文の「天」との類似性を述べる。

筆者注：ここは釋讀しにくい。ひとまず比較的文意の通りのよい羅小虎の讀みに従っておく。

【12】「室女」について。整理者は「主如」に讀む。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は「主」を秦穆公のこととする。

筆者注：ここの「主」は文脈からいって公子重耳のことであろう。

「疾」について。整理者は『左傳』昭公九年「辰在子卯，謂之疾日」，杜預注「疾，惡也。」を引用する。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の馬楠はこれを「急」に訓ずる。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の石小力はこれを「急」「速」に訓じて、「疾利」を利に急ぐ意，眼中にただ利益のみある意として、『韓非子』難四「千金之家，其子不仁，人之急利甚也。」を引用する。

難言 2017 の lht（劉洪濤）は，これは惡ではなく「力」（つとめる）の意とする。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）もこれを「亟」，力を盡くす意とし、『楚辭』九章惜誦「疾親君而無它兮，有招禍之道也。」，朱熹注「疾，猶力也。」，『呂氏春秋』尊師「凡學，必務進業，心則無營，疾諷誦，謹司聞。」，高誘注「疾，力。」を引用し，簡文の「疾利」を力を利に盡くす意とする。

子居 2017 は lht に従う。

筆者注：ここは整理者のように解釋して「疾利」が先の「秉禍利身」に對應すると考えるのが適當。もちろん石小力のいうように，これは「誠我主故弗秉」にも呼應する。

「女」について。整理者はこれを「焉」と讀み、『墨子』非攻下「焉率天下之

百姓」，孫詒讓『簡詁』「戴云「焉犹猶乃也。」を引用し，この「疾利焉不足」と上文の「不秉禍利」が呼應すると述べる。

清華大學出土文獻讀書會2017の石小力は，「不秉禍利」の呼應は「疾利焉不足」ではなく，「誠我主故弗秉」であるとする。

「室女曰疾利女不跂誠我室古弗秉」について。整理者は「主如曰疾利焉不足，誠我主故弗秉。」に區切って読む。

劉釗2017は「主如曰疾利，焉不足。誠我主，故弗秉。」に區切る。

難言2017の羅小虎（羅濤）は「主如曰疾利，焉不足。誠我主故弗秉。」に區切り，「焉不足」の主語は簡2の「猶心」とし，この部分は，秦穆公が子犯に對して「猶心不足」と諷刺したことに子犯が返答して，公子重耳は「不秉禍利，身不忍人」だから「走去之」のであり，もしそうではなく，力を盡くして利益を追求していれば，「猶心」がどうして足りないことがあろうかと述べているのだとする。

伊諾2018は劉釗2017に従う。

筆者注：ここの句讀は劉釗2017に従うのが文脈上最も適當。

【13】「古」について。整理者は「故」に読む。

清華大學出土文獻讀書會2017の鄭邦宏は，これを楚簡によく見えるように「固」に読み，上博楚簡五『鬼神之明』「抑其力古（固）不能至焉乎。」を引用し，ここは判斷を表す副詞とする。

難言2017の羅小虎（羅濤）は整理者に従う。

筆者注：文脈によりここは整理者に従う。

「弗秉」について。整理者はこれを上文の「不秉禍利」の省略とする。

清華大學出土文獻讀書會2017の石小力はこの後に賓語の「禍」が省略されているとする。

筆者注：ここまでの議論により，ここは「不秉禍利身」の省略である。

【14】「尠」について。整理者はこれを「少」の異體字で，時間の短いことを表し，しばらく，間もなくの意とし，『孟子』萬章上「少則洋洋焉。」を引用する。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の馬楠は，これを「小」「少」「肖」に従って音とする「瘠」などのように読めると述べる。またその前に斷讀符號があるが，これは上文から續いているかもしれないとし，『論語義疏』に顔延之を引いて「秉小居薄」の語があり，「秉小」「秉禍」の意味は同様で，『國語』のいう「以喪得國」のようなものであるという。そしてこの前後の意味は，主（秦穆公）もし我が主（重耳）利に趨ること速やかならず，誠に言う所の如く，我が主は固より禍を秉らず，とする。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の石小力は，この前後の文章は子犯が秦穆公に答えたもので，おおよその意味は，あなたがもし私の主君が禍をもたらす利の追求をあまり急いでいないと考えるならば，確かに私の主君は災難をもたらすものを取らない良いところがある，だとする。

難言 2017 の心包は，この字の後に「間」か「頃」が脱しているのではないかと述べる。

子居 2017 は整理者の讀みに従いつつ，ここを「少，公乃召子餘而問焉」に區切る。

伊諾 2018 は子居に従う。

筆者注：文脈からいって，ここは整理者の讀みでよい。

「子余（餘）」について。整理者は，これは字で趙衰をいい，諡號は「成子」，また「成季」「孟子餘」「原季」とも稱し，子犯と常に並稱されるといい，『國語』晉語四「（公子重耳）父事孤偃，師事趙衰」，『左傳』昭公十三年「（文公）有先大夫子餘・子犯，以爲腹心」を引用する。

【15】簡4冒頭三字の缺字について。整理者は下文により「子不能」を補う。

伊諾 2018 は整理者に従いつつ、簡1によって補うべきことを補足する。

筆者注：この前後は明らかに簡1の「公子不能弇（止）女（焉）」に對應しているから、ここは本文でも「子不能」を補う。

【16】「聞」について。整理者はこれは門に従う干聲で、「干」に讀むとし、『説文解字』「犯也。」を引用する。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の石小力は、これを「扞」に讀み、「蔽」と同じ意味で、「屏藩」に訓じ、保護の意として、『韓非子』存韓「韓事秦三十餘年，出則爲扞蔽，入則爲蒞薦。」を引用する。

難言 2017 は、「扞」「蔽」はそのような積極的な意味ではなく、賢良を掩い阻む行爲であるとし、『史記』范雎蔡澤傳「妒賢嫉能，御下蔽上，以成其私」（筆者注：引用文を修正）を引用する。

難言 2017 の暮四郎（黄傑）は、恐らくこれは「嫻」字で、張儒・劉毓慶 2001: 727 により、古い「干」「聞」聲の字は通用する例が多いと述べる。

難言 2017 の無痕はここを有益な忠告を阻む意とする。

召同 2017 もこれを「扞」「迂」に讀み、阻止・遮蔽する意とする。

難言 2017 のlht（劉洪濤）はこれを「闌」に讀み、「遮」に訓じ、「蔽」は「掩」に訓じてこれらは同義であり、「出」の意味とは反對だという。

難言 2017 の張崇禮はこれを「掩」に讀み（張崇禮 2012）、「隱」「蔽」の意で、ここは言葉を覆い隠すこととする。

蕭旭 2017b はこれを阻む意とする諸説に従いつつ、これを「𢇛」に讀み、俗に「扞」「捍」「攷」などに作るといい、『説文解字』「𢇛，止也。周書曰，𢇛我於艱。」などを引用する。

難言 2017 の心包は、この字は楚簡では初出ではないかという、毛公鼎や中山王器では「嫻」に作るが、楚簡で三晉の文字が記録されたのかは分ならず、また金文の「門+十」の字（「聞」「閑」にも釋す）はこの字に釋すべきかもし

れないと述べる。

難言 2017 の林少平はこれを「閉」に読んで掩うの意とする。

子居 2017 もこれを「閉」に訓じ、もと里巷の門を表し引伸して閉じる意という。

伊諾 2018 は召同 2017 に従う。

筆者注：ここは、重耳が「良註」を～しない、となるから、「註」の解釋に従ってここの読みも影響を受ける。蕭旭 2017b の見解がよいか。

「註」について。整理者はこれを「規」と読むのではないかという、『文選』張衡「東京賦」「則同規乎殷盤」，薛綜注「規，法也。」を引用して，法制度のこととする。

難言 2017 の無痕はこれを規諫，有益な忠告の意とする。

召同 2017 も同じくこれを忠告の意とし、『三國志』魏志王朗傳「朕繼嗣未立，以爲君憂，欽納至言，思聞良規。」，『抱朴子』博喻「庸夫好悅耳之華譽，而惡利行之良規」を引用する。

難言 2017 の林少平は整理者の説を否定し，如字に読んで欺瞞の意とし，また前の「良」を「諒」に読んで誠実の意とし，この前後の文章を，晉文公は身邊の近臣を遇するに，彼らの誠実と欺瞞とを掩わず，の意とする。

伊諾 2018 は召同 2017 に従う。

筆者注：ここは法制度，規諫いずれでも意味が通ずるが，用例が新しい。ここはひとまず整理者のように読んでおく。

【17】「諭」について。整理者は，これを言に従う術聲で「蔽」に読み、『禮記』郊特牲「冠而蔽之」，陸德明『釋文』「蔽，策也。」を引用する。そして或いは「蔽」に読むといい，『廣韻』「掩也。」，『韓非子』內儲說上「君子不蔽人之美，不言人之惡。」を引く。

召同 2017 は整理者に従いつつ，用例が不適當として，『韓非子』有度「遠在

千里外，不敢易其辭。政在郎中，不敢蔽善飾非。』、『韓非子』兼愛「今天大旱，即當朕身履，未知得罪于上下，有善不敢蔽，有罪不敢赦，簡在帝心」、『漢書』李尋傳「佞巧依勢，微言毀譽，進類蔽善。』，顔師古注「進其党類，而擁蔽善人。」を引用する。

子居 2017 は召同 2017 に従う。

筆者注：ここは整理者の読みでよい。

【18】「出」について。整理者は『呂氏春秋』忠廉「殺身出生以徇其君」，高誘注「出，去也。」を引用し，或いは「細」に讀むとして，『禮記』王制「不孝者君細以爵」，陸德明『釋文』「細，退也。」を引用する。

召同 2017 はここは「黜」に讀む方が更によく，『鹽鐵論』散不足「故人主有私人以財，不私人以官，懸賞以待功，序爵以俟賢，舉善若不足，黜惡若仇讎，固爲其非功而殘百姓也。』，『抱朴子』外篇君道「儀決水以進善，鈞絕弦以黜惡，昭德塞違，庸親昵賢。」などを引用し，「舉善」「進善」と「黜惡」とが對になっているという。

子居 2017 はもし一字の缺字が「惡」ならこれは「細」に讀むといい，『禮記』王制「上賢以崇德，簡不肖以細惡。」を引用するが，「不蔽有善」は上文の「不開良規」に連なるため，整理者がいうように「必出有惡」と「不蔽有善」が反對の意味になるとは限らず，「必出有惡」の「出」が下文の「……于難」と關係して重耳が晉國を離れたことを指すはずで，缺字は必ずしも「惡」とは限らないと述べる。

伊諾 2018 は子居 2017 を否定し，如字に讀んでも「細」「黜」に讀んでも意味が通じるが，ここは「黜」がより適切だと述べる。

筆者注：ここは整理者の読みで特に問題ない。

「必出又□」について。整理者は「必出有惡」としつつ，これが先の「不諭有善」と對義になっており，兩者で，善を棄てず必ず惡を去るの意とする。

筆者注：整理者の述べる通り、ここは前文の「善」に對應しており、整理者に従って「惡」字を補う。

簡5冒頭の缺字について。整理者は最初の一字に「惡」を補うべきではないかという。

王寧 2017c は後の二字の缺字は「吾主」ではないかと述べる。

伊諾 2018 は整理者・王寧 2017c に従う。

筆者注：ここは後文から考えても、重耳の側近についての言及が續くと考えた方がよい。

【19】「瞿」について。整理者はこれを「𪔐」字の省體ではないかといひ、「鵠」で「諤」に読み、『文選』韋孟「諷諫」「諤諤黃髮」、李善注「諤諤，正直貌。」を引用する。（陳穎飛 2017 では「直」に訓ずる。）

難言 2017 の汗天山は整理者説を否定し、これは「諤」字かもしれない、上旁が變化した「瞿」に釋して「勸」に読み、ここは卯・矛聲は通假するので「懋」に読むべきだとし、『説文解字』「勸，勉也。」「懋，勉也。从心楸聲。《虞書》曰，時惟懋哉。」を引用し、これらは同じ意味で、簡文は志において勤勉であることをいうが、或いは『戰國策』宋衛策「荊王大説，許救甚勸。」，注「勸，猶力也。」を引用して、簡文は志において力をつくす意ともする。

王寧 2017c は整理者の読みでは文意が通じにくいとし、これを「𪔐」又は「𪔐」に読んで「驚」に訓じ、『玉篇』「𪔐，驚𪔐也。』、『廣韻』入声「𪔐，驚也。」を引用し、引伸して「錯𪔐」の意として『後漢書』寒朗傳「而二人錯𪔐不能對」，李注「錯𪔐，猶倉卒也。」を引用し、驚𪔐によって慌ただしくする意とする。

蕭旭 2017b はこれを「𪔐」に読み、『説文解字』「相遇驚也。」を引用し、驚く意で、引伸しておそれ戒める、恭敬の意とする。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は、これは郭店楚簡『老子』丙本・包山楚簡

2.168 に近似しており、佳に従う單の省聲で「瘳」に読み、勞苦の意とし、『說文解字』「瘳，勞病也。』、『爾雅』釋詁下「瘳，勞也。」などを引用する。

子居 2017 はこれを「萬」に読む。

伊諾 2018 は蕭旭 2017b に従う。

筆者注：ここは諸説紛々としているが、困難に動じない、ないし毅然とするといったプラス方向の意味にとりたいところである。ひとまず汗天山の意味にとっておく。

「𨔵（留）於志」について。整理者はこれを車に従う菑聲で「留」に読み、『管子』正世「不慕古，不留今」，尹知章注「留，謂守常不變」を引用する。

王寧 2017c はこれを「籀」に読み、『說文解字』「籀，讀書也。』，段本「讀，籀書也。」を引用し、読む意とし、「志」は上博簡八『志書乃言』や『左傳』にしばしば現れる「周志」「前志」などの「志書」のこととする。

蕭旭 2017b はここが前文の「□□於難」に對應するとして、「留於志」に読み、意向、気持ちを止める意とする。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は、留に従って聲符（來母幽部）とし、幽・宵部は楚文字でしばしば通假するといい、これを「勞」（來母宵部）に読み、この前後を「瘳勞於志」と読んで、志のために苦勞する意とする。

子居 2017 はこれを「葵」に読み、『禮記』檀弓「制綽衾，設葵絜，爲使人勿惡也。』，鄭玄注「葵絜，棺之牆飾。』，『周禮』考工記「是故規之以視其圓也，萬之以視其匡也。』，鄭玄注「等爲萬葵，以運輸上，輪中萬葵，則不匡刺也。」などを引用し、「萬葵」は正輪の器で、ここは重耳がその志を正しくするさまを形容すると述べる。

筆者注：整理者らが想定するように、ここはプラスの意味で重耳の側近が志を保つ意味であろう。まずは整理者に従っておく。

【20】「忻」について。整理者は『玉篇』「喜也。」を引用する。



馮勝君 2017 は整理者の讀みが文脈に合わないとし、これを「愁」に讀み、「忻」は曉紐文部、「愁」は疑紐文部に屬し、これらは疊韻で聲紐も近いとして（「斤」を聲符とする字は少なからず疑紐で、「愁」は「𢇛」を聲符とし、土に從うそれぞれの字は異體字の関係にある）、「不忻（愁）」は肯んじない、願わない意とし、『詩』小雅十月之交「不愁遺一老」、『釋文』引『爾雅』「愁，願也。」などを引用する。

難言 2017 の汗天山はこれを求める意の「忻」に讀めないかといい、『禮記』儒行「不忻土地。」、『詩』小雅賓之初筵「以忻爾爵。」を引用する。

難言 2017 の潘灯は汗天山に従い、新蔡楚簡甲一簡 21「忻（折）福於邵（昭）王」を引用する。

蕭旭 2017b は馮勝君 2017 の異體字の議論に從うが、『說文解字』「𢇛，犬張斷怒也。」「聽，笑兒。」、『廣雅』「聽，笑也。」などから、「聽」「斷」「欣」「愁」などは異體字とし、『說文解字』「愁，一曰說也，一曰甘也。」の「說」は喜ぶの意であり、整理者は正しいと補足する。

子居 2017 は整理者に従い、「不忻」は戰國後期に出現し、その前の「幸得」は先秦傳世文獻に用例がないと述べる。

伊諾 2018 は整理者・馮勝君 2017 は意味が通じるとしつつ、蕭旭 2017b の補足説明に從う。

筆者注：ここは整理者の讀みで文脈上特に問題はない。

「蜀」について。整理者は「獨」に讀む。

【21】「僉」について。整理者はこれを「僉」字ではないかといい、『小爾雅』廣言「同也。」を引用する。（陳穎飛 2017 では「皆」「同」に訓ずる。）

難言 2017 の暮四郎（黃傑）はこれを「斂」に讀む。

難言 2017 の黑白熊は整理者に從う。

難言 2017 の王寧はこれを「共」の意とする。

難言 2017 の劉偉濤はその上傍の横畫が同じ簡 6「無」のそれと類似の作用を受けていることを指摘する。

難言 2017 の zzusdy は類似の筆法の「兪」が上博楚簡『用曰』簡 17 に見えることを指摘する。

王寧 2017c は『書』堯典・『楚辭』天問にいう「兪曰」のことで、これは直接「兪」に釋してよく、「幸得」以下の文章は『志』の言葉とする。

馮勝君 2017 は整理者に従う。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は、上古漢語で「兪」を動詞に用いる例は少なく、『説文解字』「兪，皆也。」などとあるように、「共」の異體字とし、「共利」は古書に多く見えるといい、『論語』公冶長「與朋友共，敝之而無憾。」、『莊子』達兵「不與民共利，行年七十而猶有嬰兒之色。」などを引用する。また包山楚簡に「兪殺」或いは「劍殺」に釋して皆、共同と解される字のあることを指摘する。

子居 2017 はこれを「𡗗」に作り、共同の意とし、『正字通』「𡗗，同𡗗。」、『説文解字』「𡗗，同也。」などを引用する。

伊諾 2018 は子居 2017 を否定して整理者・羅小虎らに従いつつ、「共」の異體字とはいえないとする。

筆者注：ここも整理者の讀みで意味は通じる。

【22】「事」について。整理者は如字に讀む。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の鄭邦宏はこれを「使」に讀み、假定の接續詞とし、『論語』泰伯「如有周公之才之美，使驕且吝，其餘不足觀也已。」，劉淇『助字辨略』「使，假設之辭也。」を引用する。

陳偉 2017c も鄭邦宏と同様の見解を示し、『國語』吳語「使死者無知，則已矣。若其有知，吾何面目以見員也。」を引用する。

伊諾 2018 は鄭邦宏に従う。

筆者注：ここは文脈からいって鄭邦宏のいうように假定の條件文として讀む

のがよい。

「訛」について。整理者はこれを「過」に読み、『論語』子路「赦小過」，皇侃疏「過，誤也。」を引用する。

馮勝君 2017 は整理者に従う。

子居 2017 は整理者に従う。

【23】「不忤以人」について。整理者は「以」を「及」に訓じ、『國語』周語上引『書』湯誓に「無以萬夫」とあり、『呂氏春秋』順民が「以」を「及」にすることを示す。そして、この句の意味は、他人に責任を押しつけることを喜ばない、であるとする。

難言 2017 の厚予は「忤」を「斤」に読んで「察」に訓ずる。

【24】「塵」について。整理者はこれを「擅」に獨み、『說文解字』「專也。」を引用する。

難言 2017 の暮四郎（黃傑）はこれを「展」に読み、郭店楚簡『緇衣』簡 36・上博簡六『用曰』簡 17 はいずれも「塵」を「展」に用いており、前の「僉（斂）」と對をなすとし、上博楚簡『用曰』簡 17「僉（斂）之不骨（過），而塵（展）之亦不能違。」を引用する。

難言 2017 の心包は鄒可晶 2013 により、上博楚簡九『舉王治天下』「昔者有神，顧監在下，乃語周之先祖，曰……」の用例を補足する。

難言 2017 の黑白熊は整理者に従って暮四郎に異を唱える。包山楚簡 121・136 の「僉殺」の「僉」は「殺」を修飾する副詞で、包山楚簡では多人數が一人を殺した案件であり、簡文の意味に近い。「僉」は齒音字だが、「劍」は見母の字で、「兼」と音・義が近い。だが楚簡には「兼」字があつてここを無理に「兼」に読むことはできない。上博楚簡『用曰』の読みは文意の明らかな『子犯子餘』によって訂正することができる。

難言 2017 の厚予は暮四郎に従い、この前後は、過ちがあつても他人を察せ

ず自分をかえりみる意だとする。

難言 2017 の王寧は整理者に従う。

馮勝君 2017 は整理者に従う。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は、この字と上博楚簡『用曰』簡17の字を比較すると、前者の上旁で「一」の下が「田」になっているところが、後者では「一」がなく、その下は「日」の形であるが、同じ字であるといい、整理者の讀みに従い、『莊子』漁父「不仁之於人也，禍莫大焉，而由獨擅之。」、『戰國策』秦策三「且昔者，中山之地，方五百里，趙獨擅之。」などを引用する。

伊諾 2018 は整理者に従う。

筆者注：ここは誤りがあればそれを一身に引き受けるの意味であろうから、整理者のように讀んでおく。

「必身塵之」について。整理者はこの句と前の一句とは對句で、「利」「過」の對立についていっているとする。そして、その意味は、幸いにも利を得れば、自分一人で楽しまず、皆と一緒に保有しようとし、もし過誤があれば、他人に責任を押しつけることを好まず、必ず自分一人で引き受ける、であると述べる。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の鄭邦宏は整理者の解釋に従う。

【25】「寺」について。整理者はこれを「時」に獨み、『國語』越語下「時將有反」，韋昭注「時，天時。」を引用する。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の王挺斌は、これを光陰・歲月の意とし、「弱時」を年少として、古書中の「弱辰」「弱歲」「弱年」「弱齒」「弱齡」と同じとし、「弱時而強志」で、若い時の記憶力が良い意味とする。

王寧 2017c はこれを「持」に讀む。

翁倩 2017 はこれを「時」「持」に讀むのでは文意が通じないとし、「寺」は之部邪母，之部禪母・疊韻關係で通假し得る「恃」に讀み，この前後の「吾主

之二三臣」「無良左右」と呼應すると述べる。

蕭旭 2017a はこれを「植」に読み、立の意とし、『左傳』襄公三十年「其君弱植，公子侈，大子卑，大夫敖，政多門。」，孔疏「《周禮》謂草木爲植物，植爲樹立，君志弱，不樹立也。」俞樾曰，「植當爲脂膏臚敗之臚，字本作殖，亦或作埴。」を引用し，孔穎達説を是とし、『文選』和謝監靈運「弱植慕端操。」，李善引王逸楚辭注「植，志也。」，劉良注「植，立。」などを引いて，「弱時而強志」は外が強く中が空しいもので，その性格が懦弱であり，また強情であることを指すという。

難言 2017 の易泉は翁倩 2017 について，意味は反對だがと斷わりつつ，信陽楚簡簡 1-02 「【夫】 𡗗（賤）人剛恃而及於型者」，『説文』「剛，彊也。」の用例を補足する。

子居 2017 は王寧 2017c と同じく「持」に読み，「弱持」で自らを守るに弱い意であり，それは重耳のおかれた客觀条件からくるものであるとする。

伊諾 2018 は翁倩 2017 に従う。

筆者注：ひとまずこれを整理者に従って「時」に読んでおくが，「弱時」の用例が古書に見えないのが難點である。

「彊」について。整理者は「強」に読む。

難言 2017 の悦園は，包山楚簡 85・278 や蔡侯申鐘などにより，これを「愆」に読み，次の字と合わせて「愆志」で望みに違背する意とする。

王寧 2017c は「強志」の「志」を，『説文解字』にいう「意也。」を引いて考え方とする。そして簡 5 を「[吾主] 於難，愕籀於《志》，幸得「有利不忻獨，欲皆僉之；事有過焉不忻以人，必身擅之。」吾主弱持而強志，不〔秉禍利〕，顧監於過，而走去之。主如此謂無左右，誠毆獨其志。」と読み，子餘が秦穆公に，我が主（重耳）が難儀した時，驚き慌てる中で志書を読み，幸いにも「利益があれば獨り享けることを喜ばず，皆が得られることを望む。過失があつて

も他人に轉嫁することを喜ばず、必ず自ら引き受ける。」を讀んだ、我が主は力弱いが意志は強く、禍亂がもたらす利益を受け取ることを願わず、自分に過失があったと考え、それで逃げてきたのである、あなたがもしこのことを根據として彼に助ける者がいないと述べたのならば、まことに彼の意志を理解していない、と解釋する。

伊諾 2018 は整理者に従う。

筆者注：ここは「弱時」「強志」が對になっていると考えるのが適當であるから、整理者の讀みに従っておく。

【26】冒頭三字の缺字について。王寧 2017c は前文の子犯の會話文により、「不秉禍利」を補う。

伊諾 2018 は王寧 2017c に従う。

筆者注：文脈上、王寧 2017c の補足でよいから、原文を補っておく。

「寡」について。整理者はこれを「寡」字として「顧」に讀み、轉換を表すとし、裴學海 1954: 326 「顧猶但也。」を引用する。

難言 2017 の暮四郎（黃傑）は整理者の讀みに従いつつ、これを動詞として見る意とし、「顧」と後文の「監」が同義連用されているのではないかとし、『詩』大雅皇矣「監觀四方，求民之莫」を引用する。

王寧 2017c はこの字の前で句を切る。

子居 2017 は暮四郎に従う。

伊諾 2018 は暮四郎に従う。

筆者注：ここは整理者のように無理に「但」の意に解さず、暮四郎説でよいから。

「監」について。整理者は『爾雅』釋詁「視也。」を引用する。

「訛」について。整理者は「禍」に読む。

召同 2017 はこの字が清華簡（柒）では「過」が「禍」に、「誤」は「訛」に全て作られており、ここもその例外ではないと述べる。

王寧 2017c はこれを「過」に読む。

伊諾 2018 は召同 2017 に従う。

筆者注：清華簡の他篇の用例により、ここは召同 2017 に従う。

【27】「女此」について。整理者は「如此」に読む。

難言 2017 の悦園は、「如」は假定、「此」は意味がない偏義複詞とする。

伊諾 2018 は悦園に従う。

「毆」について。整理者はこれを「緊」に読み、『左傳』僖公五年「惟德繫物」，陸德明『釋文』「緊，是也。」を引用する。

「蜀」について。整理者はこれを「獨」に読む。

「蜀斤志」について。整理者はそれを「獨其志」に読んで、その志を獨り保つ意味とし、志を合する反義語であると述べ、『逸周書』官人「合志而同方，共其憂而任其難……曰交友者也。」を引用する。

王寧 2017c はこれを、その考えを孤獨にする、つまりその考え方を理解しない意とする。

子居 2017 は、ここは、重耳は晉獻公の軍に對抗することを拒絶したので、流亡を選択したのは重耳の決定によることをいうとする。そして簡文のこの部分は韻文であり、「[[吾主] 於難，愕籥於《志》，幸得‘有利不忤獨，欲皆僉之；事有過焉不忤以人，必身擅之。’吾主弱持而強志，不[秉禍利]，顧監於過，而走去之。主如此謂無左右，誠毆獨其志。』に區切って読む。

伊諾 2018 は王寧 2017c に従う。

筆者注：もし重耳に良き側近がいなければ、という条件文が先にあるから、ここは整理者のいうように、重耳がその志を自分だけで保っていたであろう、と解するのが適當。

【28】「豊」について。整理者はこれを「豈」の誤りではないかという。

程燕 2017 は次のように述べる。これと清華簡『趙簡子』簡 7 の「豊」字とは字形が異なり、包山楚簡 145 反・上博楚簡三『周易』簡 51 などのように「豊」に作るべきである。ここは上旁に省略がある。「豊」は滂紐冬部又は東部、「亡」は明紐陽部で、典籍では「邦」「方」，「方」「罔」は通假する（高享 1989: 26・312）。西周金文では伯豊方彝・仲夏父作醴鬲・豊卣・豊尊（金文編 330）・散盤（金文編 332）などの「豊」は「壺（鼓）」に従う亡聲であり、「亡」に讀める。ここの文意は、天が公子に禍をもたらずはすがない、である。

召同 2017 の心包は清華簡『晉文公入於晉』簡 3 の「酒醴」合文の字形により、ここを「豊」に讀む。

召同 2017 の汗天山は程燕 2017（筆者注：明示せず）を否定して次のようにいう。戰國簡牘にはこのような用法の「豊」字はない。これは「豊」に作り、如字に讀んで「大」に訓ずる。『玉篇』「豊，大也。」，『國語』楚語上「彼若謀楚，其必有豊敗也哉」，韋昭注「大也。」，『揚子』方言「凡物之大貌曰豊。」とある。この前後の文章は「二子事公子，苟盡有心如是，天豊悔禍於公子」に讀め，二人が公子に事えること，もしいずれもこのような気持ちならば，上天も公子に禍を降したことを後悔するだろう，の意である。この「禍」は上天が公子重耳を國外に十餘年流亡させたことをいう。

子居 2017 は整理者に従う。

伊諾 2018 は整理者に従う。

筆者注：ここは文脈上反語に解したい。整理者に従い「豈」の誤字としておく。



「慙」について。整理者はこれを「謀」に読み、『書』大禹謨「疑謀勿成」、蔡沈『集傳』「謀，圖爲也。」を引用する。

陳偉 2017a は、整理者の読みは文意に合わず、『左傳』隱公十一年「若寡人得沒于地，天其以禮悔禍于許，無寧茲許公復奉其社稷」，杜注「言天加禮於許而悔禍之。」，楊伯峻注「謂天或者依禮撤回加于許之禍。」（楊伯峻 1990）と比較すれば、これは「悔」，その前の「豊」は「禮」に読み，その前は「其以」の類の文字が脱落しており，「天禮」は「天以禮」の意味であるかもしれず，ここは疑問文ではなく平叙文だとする。

筆者注：この前後は天が公子に禍を下さない，の意にとりたいところである。よって整理者の読みで問題ない。

【29】「敷」について。整理者はこれを「膳」に読み、『説文解字』「具食也。」を引用する。

難言 2017 の lht（劉洪濤）はこれを「善」に読み，大切にする意とする。

陳偉 2017c もこれを「善」に読み，『戰國策』秦策二「齊楚之交善」，高誘注「善，猶親也。」，『呂氏春秋』貴公「夷吾善鮑叔牙」，高誘注「善，猶和也。」，『方言』卷一「黨・曉・哲，知也」，錢繹箋疏「相親愛謂之知，亦謂之善。」，『左傳』哀公十六年「又辟華氏之亂于鄭，鄭人甚善之。」，『國語』周語下「晉侯其能禮矣，王其善之。」を引用する。

子居 2017 は lht に従いつつ，これを稱贊の意とし，『呂氏春秋』淫辭「惠子爲魏惠王爲法。爲法已成，以示諸民人，民人皆善之。獻之。」などを引用する。惠王，惠王善之，以示翟翦，翟翦曰：善也」

伊諾 2018 は子居 2017 に従う。

筆者注：ここは秦穆公が子犯・子餘に物品を贈與する場面であるから，lht や陳偉 2017c の解釋でよい。

【30】「邛」について。整理者はこれを邑に従う干聲として「蹇」に読む。

「邴邴」について。整理者はこれを「蹇叔」に読み、これが宋の人で、百里奚の推薦を受けて、秦穆公が迎えて上大夫とし、『韓非子』説疑に「霸王之佐」と、百里奚らと並稱されていることを述べる。(陳穎飛 2017 ではこの人物中が出土文獻で初見であり、『史記』秦本紀などに、秦の上大夫でもと宋の人で、百里奚の推薦により秦穆公に用いられ、崤の戦いの前に秦軍の敗北を予言したことが『春秋』三傳の僖公三十三年に見えること、『韓非子』難二・説疑にも見えること、ここで治國の道のような重要問題について尋ねられていることから、彼の地位が表されていることをいう。)

子居 2017 は先秦兩漢の文獻に蹇叔を宋の出身とする説はなく(『史記』李斯列傳に「迎蹇叔于宋」とあるが宋人であるとは記されていない)、蹇叔は邴の人で『韓非子』難二「且蹇叔處于而干亡，處秦而秦霸，非蹇叔愚於干而智於秦也，此有君與無臣也。」の記事に合うといい、『説文解字』「邴，國也，今屬臨淮。从邑干聲。一曰邴本屬吳。」を引用する。

伊諾 2018 は子居に従う。

【31】「割」について。整理者はこれを「曷」に読み、『説文解字』「何也。」、『呂氏春秋』忠廉「果伏劍而死」，高誘注「果，終也。」を引用する。

「以」について。整理者はこれを「有」に訓じ、『吳越春秋』王僚使公子光伝に季札の言葉を引いて「社稷以奉」とあり、『史記』吳太伯世家がそれを「社稷有奉」に作ることをいう。

「天命……民心」について。段雅麗 2018 は本篇の「天命」および「民心」を『孟子』離婁上「順天者存，逆天者亡。」，萬章上「莫之爲而爲者，天也。莫之致而至者，命也。」，離婁上「桀紂之失天下也，失其民也。失其民者，失其心也。」などに見える民を重視する天命思想に關連づけ、本篇が『孟子』の思想に近いことを論じる。

「不果以歳」について。整理者はこれを「不果以國」に読み、國を有つ、國を得るを果たさずと解し、「果」は國を得るの意とし、『左傳』僖公二十八年「晉侯在外，十九年矣，而果得晉國。」を引用する。

難言 2017 の xiaosong は、この前後は、「曷有僕若是而不果。以國民心信難成也哉。」と區切るべきで、「不果」は古書にしばしば見え、成功しない、願望を達成しない意であり、「以」はよつての意で、「國民心」は國民の心の意であり、『晏子春秋』外篇に「以傷國民義哉」とあり、「國民義」「國民心」の構造は同じで、ここの意味は、（重耳が）どうしてこのような良い臣下がいながら成功できないのか、それは國家や民衆の心がまことにおさめ難いからなのではないか、とする。

伊諾 2018 は整理者の句讀に従う。

筆者注：ここは文脈上、整理者の句讀でよい。

【32】「毆」について。整理者はこれを「緊」に読んで「惟」に訓じ、裴學海 1954: 218 を示す。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の鄭邦宏はこれを「抑」に読んで、楚簡にしばしば見えるといい、清華簡（陸）『鄭文公問太伯』（甲本）簡 9 + 10「某（世）及虐（吾）先君邵公・刺（厲）公，毆（抑）天也，其毆（抑）人也，爲是牢𧇵（鼠）不能同穴，朝夕或（鬥）戕（鬪），亦不𦵏（失）斬伐。」を引用し、轉換の接續詞とする。

難言 2017 の厚予はこれを上文に繋げて讀む。

子居 2017 はこれを「是」に訓ずる。

伊諾 2018 は厚予の句讀に従い、「也」に讀む。

筆者注：この前後で「也」が用いられており、それに讀むのはやや無理があらうか。ここは清華簡の他篇の用例により、鄭邦宏に従っておく。

【33】「庀」について。整理者はこれを「𠂔」に作り、「宅」字として「度」

に読み、『説文解字』「法制也。」を引用する。

召同 2017 はこれを「稟」に読み、「稟度」で『國語』呉語「狐埋之而狐搢之，是以無成功。今天王既封植越國，以明聞于天下，而又刈亡之，是天王之無成勞也。雖四方之諸侯，則何實以事呉。敢使下臣盡辭，唯天王秉利度義焉」の「秉利度義」の省略であり、『孔子家語』辯政に「此地民有賢於不齊者五人，不齊事之而稟度焉。」と「稟度」の語があり，教えを受ける意とする。

蕭旭 2017b はこれを「庀」に作る。

子居 2017 は整理者に従う。

伊諾 2018 は「秉度」を整理者の解釋に沿って「秉持法度」の意とする。

筆者注：圖版により，この字は蕭旭 2017b に従って作り，整理者の讀みに従う。

「端」について。整理者はこれを「端」に読み、『説文解字』「直也。」を引用する。

「譖」について。整理者はこれを「僭」に読み、『詩』抑「不僭不賊」，毛傳「僭，差也。」を引用する。

蕭旭 2017b はこれを「讒」に読み，譖讒の意とする。

子居 2017 はこれを如字に讀む。

「忒」について。整理者はこれを「忒」に読み、『詩』抑「昊天不忒」，鄭箋「不差忒也。」を引用する。

蕭旭 2017b は『廣雅』「僭・忒，差也。」などを引用し，變更，慝，姦惡の意とする。

子居 2017 はこれを「慝」に讀む。

「譖訖」について。整理者はこれを「僭忒」に読み、また「僭差」に作り、禮法制度を越える、常軌を失うこととし、『書』洪範「民用僭忒」、孔傳「在位不敦平，則下民僭差」を引用する。

子居 2017 はこれを「譖慝」に読み、『墨子』脩身「譖慝之言」を引用し、これはまた「讒慝」にも作り、『管子』『左傳』『國語』『呂氏春秋』に用例が多いと述べる。

伊諾 2018 は子居 2017 に従う。

筆者注：ここは前の「端正」と對になっていると考えられる。ひとまず整理者の讀みに従っておく。

【34】「凡民秉庠（度）端（端）正譖（僭）訖（忒）才（在）上之人」について。整理者は「凡民秉度端正僭忒，在上之人」に讀む。

召同 2017 は、ここは、一般に民衆が教を受けたところが正しいか「僭忒」かは、全て上の人にある、の意味とする。

子居 2017 は「凡民秉度，端正僭忒，在上之人」に區切り，「上之人」は『管子』君臣と『左傳』昭公三十一年の「君子曰」に見え，本篇と『左傳』の「君子」の評言と『管子』に關連性があるという。

筆者注：この文章の前半は、個別の語の讀みはともかく、全體を整理者の通りに解するには無理がある。ここは民衆が法制に従うにあたり，そこから外れるか外れないかは上位者の責任であり，云々，と理解すべきか。ここは召同 2017 の理解がおおよそ妥當。

「綱」について。整理者はこれを「繩」に読み、『禮記』樂記「以繩德厚」，鄭玄注「繩，猶度也。」を引用する。

子居 2017 はこれと清華簡『管仲』「執德如懸，執政如繩」とが思想的關連性を有することをいう。

【35】「斤」について。整理者はこれを「近」，或いは「困」とも讀み，ここ

までの意味を、民衆が法律制度に従うのは、正しく整い常軌に合うことであるが、誤って常軌を失えば、全ては上位者にあり、上位者が常軌を失わなければ、親しい人も誤ることはあり得ない、と述べる。

召同 2017 は、その字形と文脈とからみて、これを「下」字の誤りかもしれないと述べる。

陳偉 2017c は次のようにいう。これを「近」に讀むのは、君民関係のテーマから離れてしまう。だから整理者は譯す時に「即使」の語が増えるのである。「困」に讀むのも同様である。ここは如字に讀んで斤斧を指す。古人が斤を用いる時はしばしば繩墨を用いて正確に操作する。だから「繩」「斤」は並列になっているかもしれない。『莊子』在宥「天下好知，而百姓求竭矣。于是乎鉞鋸制焉，繩墨殺焉，椎鑿決焉。」、『鹽鐵論』大論「夫治民者，若大匠之斲，斧斤而行之，中繩則止。」、『潛夫論』贊學「夫瑚簋之器，朝祭之服，其始也，乃山野之木，蠶繭之絲耳。使巧倕加繩墨而制之以斤斧，女工加五色而制之以機杼，則皆成宗廟之器，黼黻之章，可羞于鬼神，可御于王公。」とあり、『莊子』在宥・『鹽鐵論』大論は民を治めることをいい、簡文と意味が同じである。ここで「斤」は民衆を、「繩」は君主を喩えており、對應關係にある。

子居 2017 はこの讀みを整理者に従いつつ、この一文は近親者が讒言を進めることができない意とする。

伊諾 2018 は召同 2017 の誤字説を否定し、陳偉 2017c に従う。

筆者注：ここの整理者の解釋はかなり苦しい。陳偉 2017c 説には一定の説得力があるが、挙げられた例は「斤」を直接民衆に例えるものではなく、民衆を統制する手段である。ここは「繩」も「斤」もそのように理解しておく。

【36】「埶」について。整理者はこれを「敷」に讀み、「布」に訓じ、毛公鼎（集成 2841）「專（敷）命專（敷）政」「專（敷）命于外」を引用する。

伊諾 2018 は整理者に従う。

「政命（令）荆（刑）罰」について。整理者はこれを「政令刑罰」に読み、傳世文獻で政令・刑罰は多く對稱されるといい、『荀子』議兵「故制號政令欲嚴以威，慶賞刑罰欲必以信。」を引用する。

子居 2017 は、これは傳世文獻では『周禮』『管子』『荀子』にしか見えず、齊の特色だと述べる。

【37】「事衆若事一人」について。整理者は「使衆若使一人」に讀む。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の馬楠は、『荀子』不苟「總天下之要，治海內之衆，若使一人。」を引用する。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は整理者に従う。

子居 2017 は『孫子』九地「故善用兵者，携手若使一人。」を引用する。

筆者注：ここの用例は馬楠もいうように『荀子』の用例に近い。

「不穀（穀）余」について。整理者は「不穀余」に讀む。

子居 2017 は整理者に従いつつ、この表現が先秦傳世文獻になく、清華簡『管仲』に見え、また「敢問其……」形式は『孟子』『莊子』『呂氏春秋』『禮記』少儀、『論語』子路に見えることを指摘する。

伊諾 2018 は子居に従う。

「猷」について。整理者はこれを「猶」と同じといい、『左傳』襄公十年「猶有鬼神，於彼加之」，楊伯峻注「猶，假如。」（楊伯峻 1990）を引用する。

陳偉 2017d はこれを「猶」に讀みつつ、「仍」に訓ずる。

伊諾 2018 は陳偉 2017d を否定し、整理者の解釋に従い、下文の「必當語我哉」に繋げて理解する。

「𠂔」について。整理者はこれを「叔」に讀む。

子居 2017 は「叔」を「叔父」「蹇叔」のかわりに呼び掛けに用いるのは、

『戰國策』趙策二「王遂胡服。使王孫繼告公子成曰，寡人胡服，且將以，亦欲叔之服之也。……今寡人作教易服，而叔不服，吾恐天下議之也。」にも見えるように，口語化した現象であることをいう。

「是」について。整理者は如字に讀む。

難言 2017 の暮四郎（黃傑）はこれを「寔」に讀む。

「猷詒是緡遺老之言」について。整理者は「猶叔是聞遺老之言」に讀む。

陳偉 2017d は，これを「猶叔是聞，遺老之言」に區切って讀む。

子居 2017 は「遺老」や後の「必當」が戰國末期の表現であると述べる。

筆者注：ここは整理者の読みではやや不安があるが，ひとまずそれに従っておく。

【38】「寔」について。整理者はこれを「寧」に讀み，王引之『經傳釋詞』卷六「寧，猶豈也。」を引用する。

【39】「從」について。整理者はこれを追いかける意とし，『左傳』桓公五年「祝聃請從之」，楊伯峻注「從之，謂追逐之也。」（楊伯峻 1990）を引用する。

難言 2017 の汗天山は整理者に従う。

「𪔐」について。整理者はこれを「雉」に讀む。

蕭旭 2017b は，これは「鵠」の旁を増した字とし，『說文解字』「鵠，鵠胡，汙澤也。鵠，鵠或從弟」などを引用する。

【40】「風」について。整理者は文中でキジが飛ぶ風向きを指すと述べる。

難言 2017 の汗天山はこれを先の文章でいる「昔之舊聖哲人」の教化・風氣などのことだとし，『廣韻』東韻「風，教也。」などその種の「風」の用例を引用する。

難言 2017 の王寧は，これは『書』費誓「馬牛其風，臣妾逋逃，勿敢越逐」，



『左傳』僖公四年「唯是風馬牛不相及也」の「風」で、古訓は「佚」「放」とし、逃げる意味とする。

子居 2017 はこれを音聲に訓じ、雉の鳴き聲で、ここは前賢の遺風を指すとし、『詩』大雅崧高「其詩孔碩，其風肆好。」、『經典釋文』引王肅注「風，音也。」などを引用する。

「卑（譬）若從驪（雉）狀（然），虐（吾）尚（當）觀示（其）風」について。整理者はこれを「譬若從雉然，吾當觀其風」に読み、ここは、例えばキジを追いかけるのと同じく、私達はその飛んでいく風向きを観察しなければならない、の意であり、『淮南子』覽冥が周書を引いて「掩雉不得，更順其風。」を引用する。

難言 2017 の汗天山はここの意味は、秦公が蹇叔に「昔之舊聖哲人」の道について教えを請い、蹇叔にその見聞した遺老の言を言ってくれるよう請うており、そして例え自分が蹇叔の教えを採用しなくても、雉を追いかける場合のようにそれに追いつけなくても、秦公自身も「昔之舊聖哲人」の教化・風氣などについて知ることができよう、だと理解する。

難言 2017 の王寧は、ここは雉を捕らえることができない、轉じて雉が捕まえられない原因を検討することをいい、言外に、例え秦穆公自身が遺老の言葉を用いることができなくとも、遺老がどのように言っているのか分かっていることを述べているとする。

難言 2017 の汗天山は、ここの「從雉」以下の文と整理者のいう周書の「掩雉」（網の類）以下の文とは意味が異なるといい、先の自説を再確認する。

伊諾 2018 は汗天山に従う。

筆者注：ここは、蹇叔が遺老の言を言うように穆公に語るように要請しており、その後の意味は整理者のような民俗的なニュアンスを含んだ解釈でよいのではないか。

【41】「事」について。整理者は『周禮』宮正「凡邦之事蹕」，鄭玄注「事，祭事也。」を引用する。

「凡君齋<sub>二</sub>緡莫可緡。昔者成湯」について。整理者は「凡君之所問莫可問。昔者成湯」に讀む。

子居 2017 は、本篇の「昔者成湯」から「邦乃遂亡」までは恐らく『書』系の篇章の逸文を引用したものであり、「之所問」の表現は傳世文獻では戰國末期から現れると述べる。

「神事山川」について。整理者は、これは神を祭祀する方式で山川を祭祀することで、『管子』侈靡「以時事天，以天事神，以神事鬼」を引用し、ここと同様の用法だとする。

【42】「以恵和民」について。整理者はこれを「以德和民」に讀み、『左傳』隱公四年参照といい、清華簡『管仲』では「和民以德」に作ると述べる。

子居 2017 は、これが清華簡『管仲』と同源で、先の「政令刑罰」が清華簡『殷高宗問於三壽』簡 18-19「恭神以敬，和民用政，留邦偃兵，四方達寧，元哲竝進，讒謠則屏，是名曰聖。」と關係し、また清華簡『湯處於湯丘』簡 2-8「湯亦食之，曰，允。此可以和民乎。……先人有言。能其事而得其食，是名曰昌。未能其事而得其食，是名曰喪。必使事與食相當。今小臣能塵彰百義，以和利萬民，以修四時之政，以設九事之人，以長奉社稷，吾此是爲見之。」，『子產』簡 11-12「有道之君，能修其邦國以和民。」と周文化とは異なる齊・宋文化や法家との關連性を有することを述べる。

伊諾 2018 はは子居 2017 に従う。

【43】「句」について。整理者はこれを「後」に讀む。

王寧 2017b はこれを「后」に讀み、清華簡『尹至』『尹誥』に同様に同様の例があることを示す。

筆者注：ここは整理者の読みでよい。

「四方尸莫句」について。整理者はこれを「四方夷莫後」に読み、この句は湯が夷を征伐したありさまをいい、『書』にもと記載されていたが既に失われ、『孟子』梁惠王下「書曰、「湯一征，自葛始。」天下信之。東面而征，西夷怨。南面而征，北狄怨。曰，「奚爲後我。」」，滕文公下「「湯始征，自葛載。」十一征而無敵於天下。東面而征，西夷怨。南面而征，北狄怨。曰，「奚爲後我。」」は皆『書』を引いて議論しており，語句も異なるところがあると述べる。

難言 2017 の ee（單育辰）は上博楚簡『容成氏』簡 39「湯聞之，於是乎慎戒微賢，德惠而不暇，糝（柔）三十尸（夷）而能之。」を引用し，湯の時に確かに夷方を慰撫したことが分かると述べる。

蕭旭 2017b は整理者に従いつつも、『書』に關連記事があるとして『書』仲虺之誥「初征自葛，東征西夷怨，南征北狄怨。曰，「奚獨後予。」攸徂之民，室家相慶，曰，「徯予後，後來其蘇。」」を引用する。

子居 2017 は整理者を否定し，ここは遠方の四夷が争って歸附することをいい，成湯の征伐とは関係ないとする。

伊諾 2018 は子居 2017 に従う。

筆者注：ここは整理者らがいうように『書』仲虺之誥や『孟子』梁惠王下・滕文公下の記事を下敷きにしているのであろう。なおこの先の簡文における議論に關係するので、『孟子』滕文公下の引用文を補足しておく。「湯始征，自葛載，十一征而無敵於天下，東面而征西夷怨，南面而征北狄怨，曰，奚爲後我。民之望之，若大旱之望雨也。歸市者弗止，芸者不變，誅其君，弔其民，如時雨降，民大悦。書曰，徯我后，後來其無罰。」

【44】「與」について。整理者は裴學海 1954: 9 により，これを「使」に訓ずる。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の馬楠は「與人」が上文に屬するとする。

難言 2017 の ee (單育辰) は馬楠の句讀に従う。

難言 2017 の lht (劉洪濤) はこれを「舉」に讀み、全ての意とする。

王寧 2017b は區切りを馬楠に従い、「莫后與人」は、君位を他人に渡すのを拒否すること、他人を自分の君主にするのを拒否する意味で、彼らは「面見湯」と湯を君主にしたいのだという。

難言 2017 の潘灯はこれを「舉」又は「輿」に讀み、『史記』酈生陸賈列傳「人衆車舉，萬物殷富。」について『漢書』は「舉」を「輿」に作ると述べる。

林少平 2017a はここが『呂氏春秋』孟冬紀異用・『史記』殷本紀など傳世文獻に見える「網開三面」の典據だと述べ、「……，四方尸幕，句與仁面，見若湯濡雨，方奔之，鹿膺焉。」と區切って讀む。

陶金 2017 は基本的に林少平 2017a の區切りに従いつつ、『墨子』明鬼下引尚書「嗚呼，古者有夏，方未有禍之時，百獸貞蟲，允及飛鳥，莫不比方。矧佳人面，胡敢異心。山川鬼神，亦莫敢不寧。若能共允，佳天下之合，下士之葆。」には簡文に類似する部分があり、「矧（訖，戒）佳（惟）人面，靡不……」の語は漢武帝以降の漢官關係記事にしばしば見えろとし、「句」は「苟」に讀み、「人面」は人類を指し、ここを「……，四方夷貊，苟與人面，……」に讀んで、四方の夷貊の地はただ人でありさえすれば皆湯に会いに行くことができた、とするか、「……，四方夷貊，苟（且）與人面，……」に讀んで、四方の夷貊は立場のある人に従って成湯にまみえた、とするかのいずれかとする。

蕭旭 2017b は整理者の句讀でよいとし、これは介詞の「以」「用」で、次の「人面」は人形の面具で、四夷の風俗であり、その面をつけて湯に朝見したとする。

子居 2017 は馬楠に従う。

伊諾 2018 は馬楠に従う子居 2017 に同意する。

筆者注：ここは馬楠の句讀でよく、文章としてはやはり『書』仲虺之誥や

『孟子』梁惠王下・滕文公下と類似の意味であろう。假借字については陶金 2017 の第一説におおむね従い、「四方夷貊後輿面，見湯……」に従って讀んでおく。

【45】「𩇛」について。整理者はこれを雨に従う鳧聲とし（單育辰 2008: 21-28），これは「濡」に讀むのではないかという、『史記』刺客列傳「鄉使政誠知其姊無濡忍之志」，司馬貞索隱「濡，潤也。」を引用する。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の馬楠は，これを鳧に従って音とし，「溥」に讀み，「大」に訓ずるとする。

難言 2017 は，これを「𩇛」字で，別の字に通假するのではないかという。

難言 2017 の ee（單育辰）は，これを次の「雨」と合わせて暴雨に解する

難言 2017 の金字祥は，傳世文獻では干魃で雨を望む場合は「淫雨」「霖雨」が用いられ，「暴雨」は災害をもたらすものであるから，整理者の讀みが比較的よいが，これを同じく唇音，合口三等侯部である「霧」にも讀めるのではないかという。

難言 2017 の王寧は次のようにいう。「𩇛」は「𠂔（伏）」聲に従うから，これは「風」に讀める。「風」は甲骨文では全て「鳳」に假借し（合集 12817 正，懷 239），「風（鳳）」は幫紐侵部だが，『說文解字』は「鳳之古文轉…故朋黨字」といい，「朋」も同じく并紐雙聲・職蒸對轉，疊韻で音が近いからである。『管子』幼官（玄宮）「試行若風雨，發如雷電」，輕重甲「發若雷霆，動若風雨」は，その行くことの速いのを言うのである。また『楚帛書』甲篇の「𩇛𩇛」（包義・伏羲）の「𩇛」とは異體字として関係があるかもしれないという。

王寧 2017b はこれを「風」と讀む自説を補強する。

難言 2017 の潘灯は，これは「霍」の繁體で直接それに讀み，速い意とし，荊州に「霍地霍地下」という方言があることを述べる。またこの字の下旁について，類似の文字が包山楚簡 183（「堆」に釋す），曾侯乙墓竹簡 46・86・89，新蔡楚簡乙四 76 などに見えると述べる。

難言 2017 の水之甘はこれを「𩇑」で「𩇑」の訛體とし、包山楚簡「𩇑𩇑」の「𩇑」の下旁が似ており、これらが混ざったのかもしれない、「𩇑」に従うなら「𩇑」に讀め、雨を祈る意となるが、字形上あまりよくないと述べる。

蕭旭 2017b は ee に従う。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は ee に従い、竝母魚部の「𩇑」と竝母藥部の「𩇑」とは、上博楚簡『容成氏』の𩇑に口の子（魚部）が「𩇑」（藥部）に通じるように、楚系文字で通假し得ることを述べる。

子居 2017 は胡厚宣 1980 が「靈」「𩇑」は甲骨文字では一字だったとすることなどにより、これを「靈」の誤りとする。

伊諾 2018 は子居 2017 に従う。

筆者注：ここは前出の『孟子』滕文公下の説話にあるように、四方の夷が成湯に歸服するさまを表しているのであろうが、諸家の読みでは理解しにくい。ここは「逢」（竝母東部）に讀んで「……，若逢雨，……」と區切っておく（大西克也氏のご教示による）。

「方」について。清華大學出土文獻讀書會 2017 の馬楠は、これは副詞で、まさに～しているの意とし、『左傳』定公四年「國家方危，諸侯方貳」を引用する。

王寧 2017b はこれを「并」に讀み、簡 13 の「方走去之」の「方」も同様とし、『漢書』楊雄傳上「方玉車之千乘」，顏注「方，并也。」などを引用し，「方奔」「方走」は「并奔」「并走」の意とする。

難言 2017 の水墨翰林はこの前後の文章を「四方夷莫后與人面見湯，若〔𩇑〕雨方奔之而鹿膺，焉用果念政九州而命君之。」と區切って讀んだ上で，「方」（幫母陽部）を「𩇑」（竝母物部）に，「奔」（幫母文部）を「𩇑」（竝母物部）に讀み，「方出奔（𩇑𩇑）」で氣勢が起こって盛んなさま，ここは雨の勢いが大きな様子といい，『後漢書』馮衍傳下「淚汎瀾而雨集兮，氣滂𩇑而雲披。」を引

用する。またこれは「滂霈」にも讀めるかもしれないという。

蕭旭 2017b はこれを「將」の意とする。

筆者注：文脈上、ここは馬楠の讀みでよいであろう。

「而」について。清華大學出土文獻讀書會 2017 の馬楠はこれは衍字かもしれないといい、「面見湯，若溥雨方奔之而鹿鷹焉」が下文の「見受若大岸將具崩方走去之」と對應するとする。

「鹿」について。整理者はこれを「鹿」に作り、その字形が睡虎地秦簡『日書』甲 75 背の字に近いことを指摘する。

難言 2017 の ee（單育辰）はこれを「廌」または「廌」に従う字に作る。また單育辰 2016 により、新蔡甲三 401・上博三『周易』簡 51 の字のように、「廌」「鹿」の上旁はしばしば混同され、正規の書法は恐らく「廌」の上旁であって、ここの文字はまず「鹿」の上旁を書き、後に誤りと分かって「廌」の上旁に書き直したもので、この種の書き直しは上博八『志書乃言』の「𠂔」字（李松儒説）に例があり、ここは「廌」「比」を組み合わせると隸定すべきで、「比」は「鹿」の下旁の變化によるのかは不明だが、「比」聲に従うならば「庇」に讀むべきだと述べる。

難言 2017 の王寧は ee に従いつつ、これは「慶」「廌」であろうし、「慶（又は廌）廌」も恐らく「響應」に讀み、ならばここを「若風雨方奔之而響應焉」に讀むのが文意が比較的通ると述べる。

難言 2017 の明珍は、これと『越公其事』簡 26 の「廌」とは上旁・下旁共に異なるから整理者説がよく、甲骨文中ここに近い字形の「鹿」字は下旁が「匕」形であり、甲骨文「廌」字にはその特徴がないと述べる。

王寧 2017b はこれを鹿に従う苟（敬，見紐耕部）の省聲で，耕陽對轉で疊韻音の近い「慶」（見紐陽部）の異體字とし，古書で「敬」と同音の「荊」と

「慶」とが通假し、曉溪旁紐雙聲・陽部疊韻の「慶」「響」が通假することを述べ、『文子』上義「發號行令而天下響應。」賈誼『過秦論』「斬木爲兵，揭竿爲旗，天下雲合響應。」などを引用して先の自説を補強し，この前後を「昔者成湯以神事山川，以德和民，四方夷莫后與人，面見湯若風雨，方奔之而響應焉。」と讀む。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は，これは「麗」の省體でくつつく意とする。

難言 2017 の水之甘は，もし羅小虎のいう通りならば，これは「灑」「漉」にも讀め，「漉」は竭きる，涸れるの意とする。

子居 2017 はこれを「皆」に讀む。

伊諾 2018 は子居 2017 に従う。

筆者注：この字の隸定については圖版により「麤」に作り「比」に讀む（大西克也氏のご教示による）。

「雁」について。整理者はこれを「膺」に讀み、『楚辭』天問「鹿何膺之」，王逸注「膺，受也。」，『楚辭』天問「汧號起雨，何以興之。撰體協脅，鹿何膺之」を引用し，鹿によって風神を例え，雨神の汧號に呼應し，簡文も鹿によって風を例え，上文の雨に呼應しているのではないかと述べる。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の馬楠はこれを「鷹」に讀む。

難言 2017 の潘灯はこれを直接「鷹」に讀み，この前後の文章を，「かつて成湯は鬼神に奉る方式によって山川地祇を祀り，徳によって人民に親しんだ。周邊の方國もまたその後に従い，見習わないものはなかった。多くの人が湯に見えるのは，疾風暴雨，鷹や鹿が飛び走るようであり，急いで拝謁した。だから成湯はついに九州に臨むことができ，人民は彼を尊敬して聖君として奉った。」と解する。

蕭旭 2017b は『玉篇』により「鷹」の古文とし，簡文は，湯が至仁で，四夷の人が大旱に大雨を望むように，急ぎ走って湯に張顯し，その行くこと，鹿



鳴が呼應するかのような感じだった、の意味とする。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は、これは「膺」（影母蒸部）の省體で「蔭」（影母侵部）に読み、「鹿膺」を「麗蔭」に読み、陰で掩われたところに頼る、と解し、『論衡』指瑞「夏后孔甲敗於首山，天雨晦冥，入於民家，……夫孔甲之入民室也，偶遭雨而蔭蔽也。」を引用する。

難言 2017 の水之甘は、これを「受」に訓じ、「鹿膺」を「慶膺」に読むのが最善といい、『文選』「昭哉世族，祥發慶膺。」，李善注「慶膺，猶膺慶也。」を引用する。

子居 2017 はこれを「安」に読む。

伊諾 2018 は子居 2017 に従う。

筆者注：ここの読みも困難であるが、前の「比」に合わせて「應」（影母蒸部）に読む（大西克也氏のご教示による）。

【46】「用」について。整理者は裴學海 1954: 92「猶則也。」を引用する。

陳偉 2017d は裴學海 1954 により、これは「則」ではなく「乃」に訓ずるのではないかとする。

蕭旭 2017b は陳偉 2017d に従う。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）も整理者を否定し、これを「於是」「所以」と解して結果を表し、簡 13「用凡君所問莫可聞」や清華簡『趙簡子』簡 4「用由今以往來，吾子將不可以不戒也」の「用」も結果を表すという。

伊諾 2018 は諸説は實際のところ同じであって、これは「於是」の意だと述べる。

筆者注：ここは文脈からいって羅小虎の解釋でよい。

「果」について。整理者は『國語』晉語三「果喪其田」，韋昭注「果猶竟也。」を引用する。

召同 2017 はこれを果敢・果決に訓ずべきだとする。

蕭旭 2017b は整理者に従う。

伊諾 2018 は整理者に従う。

筆者注：ここは文脈上明らかに整理者の理解でよい。

「念」について。整理者は「臨」に読むのではないかといい、「念」は泥母侵部、「臨」は來母侵部で、音が近く通じ得るとし、「臨」について、『穀梁傳』哀公七年「春秋有臨天下之言焉」，范甯注引徐乾「臨者，撫有之也。」を引用する。

難言 2017 の ee（單育辰）は、ここは清華簡『保訓』簡3「恐弗念終」の「念」の意に近く、『保訓』では「堪」に読んでおり、ここもそうかもしれない、「勘」に読んで通ずると述べる。

難言 2017 の心包は ee に従いつつ、『書』康王之誥「惟新陟王畢協賞罰，戡定厥功……」の「戡」が「咸」に読むことをいい、それと「堪」には違いがあることを述べる。

陳偉 2017d はこれを「咸」又は「奄」に読み、皆・盡の意ではないかといひ、『孟子』滕文公下「湯始征，自葛載。十一征而無敵于天下。東面而征，西夷怨。南面而征，北狄怨，曰，奚為後我。」，叔夷鐘銘「（成唐）咸有九州」，『詩』玄鳥「（湯）奄有九有」を引用する。

蕭旭 2017b はこれを「矜」「戡」「堪」に作り、征伐の意とする。

難言 2017 の心包は先の自説を修正して、清華簡『厚父』簡5「惟曰其助上帝亂下民之慝」の「亂」を『孟子』梁惠王下「書曰，……惟曰其助上帝，寵之四方，……」では「寵」に作り、研究者の多くは「亂」「寵」が對應關係にあるものと見做すがそうではなく、劉洪濤 2016 は『孟子』の「寵」を「治」の誤りとするが、それは「臨」に読むべきだといひ、『書』微子「殷其弗或亂正四方」の「亂正」も「臨正」に読む。

難言 2017 の林少平は「龕」の古文は「戡」に同じとし、『揚子』重黎篇「劉

龔南陽」，注「取也。與戡同。」を引用し，ここは「臨」より「戡」に読む方がよいとする。

難言 2017 の心包は自説を補足し，傳世文獻に「寵民」の例はないが「臨民」は多く，左冢漆局の「寵民」の「寵」に釋される字（今に従う龍の雙聲），清華簡『越公其事』の上旁が「今」の「冑」字（今聲），左冢漆局の「陰民」の「陰」字は關連があると述べる。

難言 2017 の王寧は，清華簡『越公其事』の「冑」字の上旁は肉月の變形かもしれない，「今」ではないと述べる。

難言 2017 の lht（劉洪濤）は整理者に従う。

子居 2017 は林少平に従う。

伊諾 2018 は蕭旭 2017b に従う。

筆者注：ここも意味のとりにくい箇所である。前文からいってここは成湯が夷の歸服をうけて九州を正しく統治した意味となろう。陳偉 2017d に従って讀んでおく。

「政」について。整理者はこれを「正」に讀み，『周禮』宰夫「歲終則令羣吏正歲會」，鄭玄注「正，猶定也。」を引用する。

難言 2017 の心包はこれは「定」に讀んだ方がよいのではないかという。

陳治軍 2017 はこれを如字に讀む。

陳偉 2017d はこれを「正」の他，「征」にも讀めるかもしれないといひ，。

蕭旭 2017b は陳偉 2017d に従う。

難言 2017 の lht（劉洪濤）は陳治軍 2017 と同じく如字に讀み，『左傳』襄公二十六年「夙興夜寐，朝夕臨政，此以知其恤民也。」など，古書にしばしば見え，「臨政九州」は『墨子』節用上「爲政一國」「爲政天下」と意味が同じであることをいう。

子居 2017 はこれを「征」に讀み，「戡征」について馬王堆帛書『黃帝書』經

法「逆節始生，愼毋戡征，彼且自抵其刑。」を引用する。

伊諾 2018 は陳偉 2017d に従う。

筆者注：ここは心包のいうように「定」に読む方が文意が通じる。

「九州」について。難言 2017 の厚予はこの後で区切る。

「𩇛」について。整理者は不明として、「承」か「烝」に読むのではないかといい、『詩』文王有聲「文王烝哉」，毛傳「烝，君也。」を引用する。（陳穎飛 2017 では長臺關楚簡・包山楚簡・葛陵楚簡などに見える「𩇛」「甘」に従う字に釋されることのある文字の省簡體かもしれないという。）

程浩 2017 は清華簡『趙簡子』簡 1・2 に上旁が共通する字「𩇛」があり，その整理者はそれを蠅の省聲で「承」に読んで「繼」に訓ずる可能性を指摘していることを述べる。

難言 2017 の王寧は清華簡『趙簡子』の「𩇛」は恐らくたつとぶ意の「尚」のより新しい字で「上」に読むとし，清華簡六『管仲』簡 16 に「𩇛」字に續いて「天下之封君」とあり，その字は「𩇛」の或體に違いなく，これも「上」に読み，簡文の字は𠂔に従う𩇛聲で，恐らく「上君」に読むのであり，「上將軍」「上君」は古書によく見られると述べる。

難言 2017 の厚予はこれを「𩇛」に読み「勉」の意とする。

難言 2017 の劉偉浠は，この字は包山楚簡，天星觀楚簡，信陽楚簡，郭店楚簡『窮達以時』簡 7 の百里奚を「𩇛卿」とした文などに見え，『窮達以時』の整理者は上旁を「𩇛」，下旁を「日」に作って朝に読み，裘錫圭は「𩇛」を聲符として「名卿」に読み，馮勝君は「龜」を聲符として「軍卿」に読み，禰健聰は「甘」に従う「龜」聲で「耆」に読み，強大の意味（『廣雅』釋詁一「耆，強也。」）でもあるとしていることを述べ，ここは，君を後に兄弟とする意とする。

王寧 2017a は、楚文字の「𨔵」字については、清華簡六『管仲』簡 16 の字も「尚（上）天下之邦君」に讀め、ここは動詞として用いられており、次の「之」は「于（於）」であり、「上君之後世、」と區切って解し、この字は𠂔に從う嘗聲の「𨔵」字（開く意）で、「𨔵」「𨔵」「𨔵」「尚」「上」は昌禪旁紐雙聲・同陽部疊韻で音が近いとして、先の自説を補強する。

難言 2017 の 1ht（劉洪濤）は清華簡『管仲』の類似の字と共に、これを「繩」に讀む。またその次の「君」も動詞として、或いは「尊」とも讀むといい、二字あわせて正す・統治するの意味とする。

難言 2017 の王寧は 1ht（劉洪濤）に反論する。劉洪濤 2016 という字は「𨔵」である。蕭旭「漢簡“尚（常）韋”解詁」（未發表）によれば「尚（常）韋」は「韠韋」（靴底の皮，革靴）で，屨に布を張る「紛嘗」の「嘗」は「尚（常）韋」の「尚」かもしれない，方言音は掌，俗字は「韠」に作り，音は上という。「尚（常）」は恐らく皮を縫い付けることで，字書では「韠」「𨔵」である。信陽楚簡に「韠屨，紫韋之納，紛（粉）純，紛（粉）𨔵」とあり，ここでは「𨔵」は名詞であり，そういった皮のことである。車馬具のこの字も「尚」と讀める。よって簡文のこの字は「嘗」に釋して「尚」「上」に讀める。

難言 2017 の張崇禮はこれを「𨔵」字の初文とし，下旁の「甘」は蟬の腹部を象り，「𨔵」は朝で，「旦」は意味を表し，その聲旁の「𨔵」は「𨔵」であり，郭店楚簡・清華簡『管仲』とここは「朝」に讀むべきだとする。

陳偉 2017b は次のように述べる。「𨔵」は郭店楚簡『窮達以時』簡 7「百里轉鬻五羊，爲伯牧牛，釋板桎而爲𨔵卿，遇秦穆。」，清華簡六『管仲』簡 16-17「仲父，𨔵天下之封君，孰可以爲君，孰不可以爲君。」，本簡，「𨔵」は清華簡七『趙簡子』簡 1「趙簡子既受𨔵將軍」，同簡 2「今吾子既爲𨔵將軍已」に見える。この二種類の書法の字の使用環境が類似しているから，程浩 2017・王寧 2017a がこれらを同一字とするのが合理的である。清華大學出土文獻讀書會 2017 の楊蒙生が清華簡『趙簡子』簡 1 の當該字についていうように，「𨔵」を

聲符として「命」に讀むのがよいのではないか。『左傳』成公二年「不使命卿鎮撫王室。」，楊伯峻注「命卿，由周王室加以任命之卿。」（楊伯峻1990），『漢書』王嘉傳「故繼世立諸侯，象賢也。雖不能盡賢，天子爲擇臣，立命卿以輔之。」，顏師古注「命卿，命於天子者也。」とある。『趙簡子』の用例は天子が任命した將軍である。『管仲』『子犯子餘』の用例は命令の意味であり，「命君」は命令・君臨，「命天下」は天下に號令する意味である。

陳治軍2017は陳治軍2015:330により，これを「繩」に讀んで「正」に訓じ，『詩』大雅緇「其繩則直。」，鄭箋「乘，聲之誤也，當爲繩也。」，『釋文』「繩本或作乘。」，『老子』第十四章「繩繩不可名。」，李榮『老子道德經注』「繩繩作乘乘。」，『易』咸卦象傳「滕口説也。」，『釋文』「滕，九家作乘。」，『呂氏春秋』舉難「則問樂騰與王孫苟端孰賢。」，『新序』雜事四は「樂騰」を「樂商」に作り，『爾雅』釋天「在庚餘額上章。」『史記』曆書「上章作商橫。」を引用する。「正卿」は「上卿」のこととし，清華簡『趙簡子』の方は「上」に讀む。

難言2017のjdskbは「龜」に従う説がよいと述べる。

難言2017のlht（劉洪濤）は「尊」に讀む自説を補足して，『詩』大雅公劉「食之飲之，君之宗之。」，毛傳「爲之君，爲之大宗也。」，鄭玄箋「宗，尊也，公劉雖去郤國來遷，群臣從而君之宗之，猶在郤也。」などを引用する。

林少平2017bは許文獻2017が清華簡『趙簡子』の「𠂔」を「裨」に讀んで「副」「偏」に訓ずるのに對し，金文編の郢鍾に見える「𠂔」の上旁からなる字の注に「从𠂔，孫詒讓曰，讀當爲簠。『左傳』昭十一年杜注云，「簠，副・倅也。」とあり，『廣韻』「副，佐也。」，『爾雅』釋詁注「副者，次長之稱。」，『說文解字』「倅，副也。」などとあることから，本簡のこの字と共に「佐」の意とする。

難言2017の羅小虎（羅濤）は陳偉2017bと同じくこれを「命」に讀む。

子居2017はこれを「定」の異體字とし，「正」に讀む。

筆者注：この字は清華簡の他篇や郭店楚簡にも見えることから，諸家の中で

は陳偉 2017b の解説に理がある。だが秦公鐘に「竈（奄）有下國」（集成 270，通釋 199b）とあり（平勢隆郎氏のご教示による），また宮島和也 2017 が清華簡『趙簡子』簡 1 の「𠂔」を「偏」に讀んでいる。ここは「遍」に讀むのが文意に適う（大西克也氏のご教示による）。

【47】「𠂔」について。整理者はこれを「就」に讀み、『爾雅』釋詁「終也。」を引用る。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の鄭邦宏は、これは清華簡『趙簡子』簡 2・8・10 の「就」と同じく介詞で、その後の内容と合わせて時間を表すとし、沈培 2015: 203-211 参照という。

陳偉 2017d は、李零 1996 により、この種の文字は鄂君啓節・望山楚簡・天星觀楚簡・包山楚簡卜筮簡など、楚簡に多く見られ、空間・時間の起點・終點を指し、「至」と同じ用法であり、「至」「到」に訓ずるべきであることを述べる。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）も「就」を「終」に讀む例は少ないといい、これを「及」「到」の意とし、ここを「及受之身」に讀み、沈培 2013 が楚簡における「就」字の用法について述べ、清華簡六『管仲』簡 23 に「及幽王之身」の表現があることを指摘する。

子居 2017 は羅小虎に従う。

伊諾 2018 は陳偉 2017d の「到」説に従う。

筆者注：整理者の讀みではこの前後の意味が通らない。ここは陳偉 2017d・羅小虎に従ってこれを「到」に讀み、また「身」を「世」と解し、紂の世となつて、の意味にとつておく。

【48】「殺三無𡇗」について。整理者はこれを「殺三無辜」に讀み、『史記』殷本紀に「醢九侯」「脯鄂侯」「剖比干」が記載されていることを指摘する。

子居 2017 は殺された三名について、『史記』殷本紀と銀雀山漢簡『聽有五患』・『呂氏春秋』過理・『韓非子』難言・『韓詩外傳』卷十では違いが見られる

ことをいう。

【49】「爇」について。整理者はこれを「橐」の省體に従う缶聲とし、「炮」に讀む。

「爲爇爲烙」について。整理者は、これが炮烙の刑を指すとし、『荀子』議兵「紂……爲炮烙刑。」、『史記』殷本紀「紂乃重刑辟，有炮烙之法。」を引用する。

趙平安 2017a は「炮」「烙」は2種類の異なるものであり、「炮」は上博楚簡『容成氏』簡44-45の「圓木」，古書にいう金柱・銅柱であり、「烙」は孟に相当する炭を盛る器具のことであるという。

【50】「某」について。整理者は次のように述べる。「某」は明母之部で、これを滂母の「胚」に讀む。『爾雅』釋詁に「胎未成。」、『墨子』明鬼下に「剗剔孕婦」，孫詒讓『問詁』引皇甫謐『帝王世紀』に「紂剖比干妻，以視其胎。」とある。または「梅」と讀むのではないか。「梅之女」は梅伯の女で、紂の時に梅伯がある。『楚辭』天問に「梅伯受醢。」とあり、『韓非子』難言も「梅伯醢」を記すが、殷本紀には「醢九侯」「九侯有好女，入之紂。九侯女不喜淫，紂怒，殺之」とある。これによれば、梅伯は九侯かもしれず、簡文のいう「梅之女」は『史記』記載の「九侯女」である。

趙平安 2017a は、「梅之女」は「梅伯之女」と解するのが常識的ではあるが、古書には紂が梅伯の女を殺したことは見えず、『淮南子』俶真訓に「逮至夏桀・殷紂，燔生人，辜諫者，爲炮烙，鑄金柱，剖賢人之心，析才士之脛，醢鬼侯之女，菹梅伯之骸。」，高誘注に「鬼侯・梅伯，紂時諸侯。梅伯說鬼侯之女美好，令紂妻之，女至，紂以爲不好，故醢鬼侯之女，菹梅伯之骸。一曰紂爲無道，梅伯數諫，故菹其骸也。」とあり，鬼侯の女と理解し得ると述べる。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は整理者の「梅」に讀む説に従い、『說文解字』「某，酸果也。」，「梅，栞也。……棰，或从某。」などを引いて「某」は「梅」の本字であり，「九」「鬼」は通假し，「九侯」は「鬼侯」であるが，梅伯・九



侯が同一人物かは不明と述べる。また孫玉文の見解として、これを「𦞦」に読み、『説文解字』「𦞦，婦始孕𦞦兆也。」、『廣雅』釋親「𦞦，胎也。」を引用し、「𦞦之女」は懷妊した女性とも述べる。

子居 2017 は羅小虎に従う。

伊諾 2018 は羅小虎に従う。

筆者注：ここは傳世文獻に見えない情報を含む部分である。假にそれを固有名詞ととると、傳世文獻で對應しそうなのは「鬼侯」「梅伯」「九侯」であり、音からいえば「梅」に近いが、そうでなければ整理者説や羅小虎が示す孫玉文説にも一考の餘地がある。

【51】「𦞦」について。整理者はこれを「桎」に讀むのではないかといひ、『説文解字』「足械也。」を引用する。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の王挺斌は、これと「桎」は古音では遠く、恐らく通じないといひ、圈束かもしれないと述べ、『廣雅』「𦞦，桎也。」，王念孫『疏證』「桎，猶拘也……𦞦，猶圈束也。『説文解字』「𦞦，牛鼻中環也。」『衆經音義』卷四云「今江北曰牛拘，江南曰𦞦。」『呂氏春秋』重己篇「使五尺豎子引其桎，而牛恣所以之。」「桎」與「𦞦」同。」を引用し、「𦞦」「桎」「圈」は同源の關係にあり、「𦞦」はもともと牛の鼻の環を指し、圈束と同様で、拘束する役割があると述べる。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の馬楠はこれを「拳」に讀む。

難言 2017 の王寧は次のようにいう。これは「拳」又は「𦞦」に作る。『説文解字』「拳，兩手同械也。从手从共，共亦聲。」，『周禮』「上臬，桔拳而桎。」とあり、「𦞦」「拳」は木にも従ひ、『周禮』秋官掌囚の鄭司農注に「拳者，兩手共一木也。在手曰桎，在足曰𦞦。」とある。「𦞦」は「𦞦」に音が近く通假するかもしれない。なぜなら「𦞦」字も「𦞦」聲に従ひ、「𦞦」と音が同じで（居倦切），『廣韻』入聲三燭・『集韻』入聲九三燭で「𦞦」「拳」はいずれも居玉切か拘玉切に讀んで音を同じくし、これら二字はもともと音が近く（見紐雙聲・

東元通轉), 後に同音になっていったのではないか。だからこの「𢇛」は「𢇛(𢇛)」と讀め, 「𢇛𢇛」は両手に枷をはめる器具である。

孟躍龍 2017 は, 整理者・王挺斌・馬楠の説を否定し, これを「𢇛」に作り, 木に従う「𢇛」聲で, これが侵部又は蒸部で職部にも讀め, 「𢇛」(質部)に音が通じると述べる。

子居 2017 は王挺斌に従いつつ, 牛鼻環來源説は否定し, 類似の字形の「𢇛」は繩製の束縛器具で, これは木製のそれだとする。

伊諾 2018 は孟躍龍 2017 に従う。

筆者注: 文脈からいってここは「𢇛𢇛」の「𢇛」に讀みたいところであるが, 諸家, この字と「𢇛」の通假についてかなり無理をしている感がある。ひとまず「𢇛」に讀んでおく。

「𢇛」について。整理者はこれを木に従う𢇛聲として「𢇛」に讀み, 『説文解字』「手械也。」を引用し, 「𢇛」は「𢇛」の本字とする(趙平安「釋「𢇛」及相關諸字」(趙平安『新出簡帛與古文字古文獻』, 商務印書館, 北京, 2009年12月) 119頁參照)。

「𢇛𢇛」について。整理者は「𢇛𢇛」に讀み, 『易』蒙「用説𢇛𢇛」, 鄭玄注「木在足曰𢇛, 在手曰𢇛。」を引用し, 紂が𢇛𢇛を用いたことは, 上博楚簡『容成氏』に「不從命者從而𢇛𢇛(𢇛)之, 於是虐(乎)𢇛(作)爲金𢇛三千。」と見えることを述べる。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の馬楠はこれを「𢇛𢇛」に讀み, 「𢇛𢇛」は意味が同じく手械で, 「𢇛𢇛」が足械・手械を指すのとは異なると述べる。

難言 2017 の林少平はこれが刑具の一種で商紂の殘酷さを示し, 『説文解字』にあるような牛鼻に似たものではないかという。

【52】「逐」について。整理者はこれを「迹」に読み、『説文解字』「近也。」を引用する。

趙平安 2017b は「逐」字の來源について論じる中で、ここの「逐」字と清華簡『管仲』のそのの書法は同じで、本篇と清華簡『晉文公入於晉』は同一書寫者であり、『晉文公入於晉』簡3の「豕」字と「豕」に従う「豢」「家」字の書法は本篇のこの字の旁とも同じであるから、この字が「豕」「豕」から成るとするのは問題がないと述べる。

【53】「陞」について。整理者はこれを「岸」の異體字ではないかという。

子居 2017 は「产」「山」は上古音で同音であるといい、これを「山」に讀んで、この文を山の崩落と解する。

伊諾 2018 は子居 2017 に従う。

筆者注：ここの難解である。『史記』外戚世家「傳十餘家，至宜陽，爲其主入山作炭，（寒）〔暮〕臥岸下百餘人，岸崩，盡壓殺臥者，少君獨得脫，不死。」など，傳世文獻には「岸崩」の用例が見られる。他方、『左傳』成公五年「山有朽壤而崩，可若何。國主山川，故山崩川竭，君爲之不舉・降服・乘縵・徹樂・出次，祝幣，史辭以禮焉。其如此而已。」など，「山崩」の用例がある。ただここは無理に「山」に讀む必要はないと考えられ，「産」「顔」「岸」が通假するから（高享 1989: 178），「岸」に讀んでおく。

「具」について。陳偉 2017d は，上博楚簡性情簡 15・38 で整理者が「則」に作って「具」に釋する字のように，楚簡の「鼎」は「具」に似ることがあり，「顛」に讀むといい，『書』盤庚中「顛越不恭」，孔安國傳「顛，隕也。」などを引用する。

難言 2017 の羅小虎（羅濤）は，これを「遽」に読み，「具」は羣母侯部で「遽」は羣母魚部であり，楚系文字で魚・侯部は比較的近く通じ，「遽」は突然の意味であると述べる。

伊諾 2018 は羅小虎に従う。

筆者注：この假借も難解であるが、「具」「俱」が通假し得る（高享 1989: 339）ので、「すべて」の意に解しておく。

「𠂔」について。整理者はこれを「𠂔」の繁體とし、『説文解字』が「𠂔」を「崩」の古文とすることを述べ、『玉篇』「毀也。」を引用する。

【54】「不死型」について。整理者はこれを「不死刑」に読み、死なない刑をただ恐れるのみで、紂の刑の恐怖を形容しているとする。

清華大學出土文獻讀書會 2017 の鄭邦宏は、この前後の意味を、自分が死なないことを懼れ、紂の各種の酷い刑が自分を害なう、として、つまり、紂の各種の酷い刑を受けるよりはむしろ死ぬことを願っており、刑罰の残酷さが分かるとする。

召同 2017 は次の「以」を「已」に読み、既にの意として、『國語』晉語四「其聞之者、吾以除之矣。」を引用し、その「以除之」も「已除之」であるから、この前後の意味は、まだ死なないことを恐れて、刑が既に身に加えられた、であると述べる。

子居 2017 は整理者に従う。

伊諾 2018 は鄭邦宏に従う。

筆者注：ここも意味をとりにくいが、鄭邦宏説が比較的文意に合う。

【55】「述」について。整理者はこれを「遂」に読む。

難言 2017 の厚予はその前の「乃」とあわせて餘分であり、ここは古書に「墜亡」がよく見えるから「墜」に読むのではないかという。

伊諾 2018 は厚予に従う。

「述崑」について。整理者はこれを「遂亡」に読み、『荀子』正論「不至於廢易遂亡」，王先謙『集解』「遂，讀爲墜。」を引用する。

難言 2017 の王寧は「亡」は「喪」の意で、この上旁の字は上博楚簡や璽印に見え、徐在國が議論していることを述べる。

子居 2017 は先秦文獻に「墜亡」の用例がないことから、ここを「遂に亡ぶ」の意に解する。

筆者注：ここは子居 2017 のいうように、素直に「遂」に讀んで如字に解するのが、文意に適う。

【56】簡 14 冒頭の缺字について。整理者は「人」を補う。

伊諾 2018 は整理者に従う。

筆者注：ここは本文でも「人」を補っておく。

「𣦵[人]」について。整理者はこれを「亡人」に讀み、それは逃亡して外にいる人のことで、重耳の自稱だとし、『禮記』大學「舅犯曰、「亡人無以爲寶」」，鄭玄注「亡人謂文公也。」を引用する。

「不孫」について。整理者はこれを「不遜」に讀み、謙遜の語で、うやうやしからずの意とする。

【57】「大膽」について。整理者は「大膽」に讀む。

子居 2017 はこれを「張膽」として『詩』大雅韓奕「四牡奕奕，孔修且張。」，毛傳「張，大。」などを引用し，「大膽」が傳世文獻では戰國末期まで見られないことをいう。

伊諾 2018 は整理者に従う。

筆者注：ここは整理者の讀みで問題ない。

「系」について。整理者はこれを「何」のような疑問詞として「奚」に讀む。

「系以」について。整理者はこれを「奚以」に讀み，「以奚」のことで，どう

しての意とし、『國語』呉語「請問戰奚以而可」，韋昭注「以，用也。」を引用する。

「天下之君子，欲迨邦系以」について。整理者は「天下之君子，欲起邦奚以」に讀む。

陳偉 2017d は，蹇叔がとりあげた大甲・盤庚・文王・武王・桀・紂・厲王・幽王はいずれも君王であって一般的な意味での君子ではないし，例え君子が君王を含むとしても，桀などの暴君はそれに含まれないといい，これを「天下之君，子欲起邦奚以」に區切って讀み，「子」は重耳の蹇叔に對する稱謂とする。

子居 2017 は，これが清華簡『管仲』簡16-17「舊天下之封君，孰可以爲君。孰不可以爲君。」に似ており，桀・紂・厲王・幽王は君たることを欲する君主であって，邦を亡ぼさんと欲するわけではなく，本篇は『管仲』を模倣しているだけで，思辨の能力や思想的な深さは到底『管仲』の作者に及ばないことをいう。

伊諾 2018 は整理者に従う。

【58】「亡邦」について。子居 2017 は，ここの「邦」は明らかに「亡」「則」の間に加筆されたもので，清華簡『晉文公入於晉』にも見え，もしこれらの篇が同一筆寫者になるものなら，その人物はあまり専門的とはいえず，誤字脱字が時々起こっており，もし楚人による筆寫ならば，底本は非楚系文字である可能性が高いと述べる。

「則」について。整理者はこれを手本の意とし、『孟子』滕文公上「惟堯則之」，朱熹『集注』「則，法也。」を引用する。

子居 2017 は整理者に従う。

【59】「備」について。整理者は『詩』旱麓「駉牡既備」，朱熹『集傳』「備，

全具也。」を引用し、或いは「服」に讀むといい、『説文解字』「用也」を引用する。

子居 2017 は、「心」においては「服」といえないから、ここは如字に讀むのがよいとする。

伊諾 2018 は子居 2017 に従う。

筆者注：ここは文脈により、整理者の如字に讀む見解の方に従っておく。

#### [解題]

清華簡『子犯子餘』については、2019 年 11 月 17 日の佛教大學紫野キャンパスにおける報告および、その時にいただいたご意見等を反映させた小寺敦 2019 において、その資料的性格を論じて筆者の見解を示している。詳しいことはそちらをご参照いただくとして、以下、簡単に『子犯子餘』のあらましを述べておく。

『子犯子餘』は、晉の公子重耳（後の文公）が楚を離れ秦穆公に身を寄せて三年經過後、穆公が公子重耳を晉に送り込む直前において、秦穆公・蹇叔、それに晉の子犯（孤偃）・子餘（趙衰）・公子重耳の間で行われた問答を記録する。穆公と子犯、穆公と子餘、そこに穆公の子犯・子餘に対する褒賞を挟み、穆公と蹇叔、公子重耳と蹇叔、の順序で會話が進む。

『子犯子餘』の整理者はこれを五段落に分ける。第一段は秦穆公と子犯との對話である。穆公は、公子重耳の現状は公子重耳にその原因があったのではないかと問う。子犯は、重耳は「定（正）」「信」を重視して禍から利益を得なかったからであると返答する。

第二段は穆公が子餘に対して、公子重耳の現状はよい側近がいなかったからではないかという。それに對して子餘は決してそうではない意味のことを述べる。第一・二段の穆公の質問にはやや皮肉が込められている。

第三段では、穆公は子犯・子餘の二人を褒め、物品を賞賜してもてなす。

第四段は穆公が臣下の蹇叔に、公子重耳の現状は民心を把握することが難しいことを表すのかと問う。蹇叔は、難しいが容易でもあり、上位者がきちんと導けばよいと答える。そして穆公が舊聖哲人の政令刑罰の行い方を尋ね、蹇叔は成湯・紂など、悪例を含めた先例を挙げる。

最後の第五段では、公子重耳が蹇叔に、天下の君子による国の興亡を問う。蹇叔は、大甲・盤庚・文王・武王、桀・紂・厲王・幽王の名を挙げる。

本篇では公子重耳とその側近である子犯・子餘が非常に肯定的に描かれている。晉文公が「定（正）」「信」を重視して禍から利益を得ないこと、政治・刑罰などを整備し、周王室の内乱をおさめて城濮の戦いで楚軍を破ったとされることは、同じ清華簡の『繁年』や『左傳』など傳世文獻の記事にも矛盾しない。

陳穎飛 2017 は、これを對話を主體とする『國語』のような「語」類の文獻とし、本篇では登場人物が5人に上るが多人數が同時に對話することも『國語』に多く見られるという。これが『國語』楚語にいう「語，治國之善語」であり、明德をもって治國の理を明らかにする道理を説くタイプの文獻ともする。そして『詩』『書』などに見える、「以德配天」に關連する西周の「德」の理念や、同じく西周の「保民」「惠民」の思想が本篇には現れており、蹇叔は儒家思想を體現していると述べ、「好定而敬信」の強烈的な儒家的思想傾向から、本篇の成立年代は孔子の後である可能性を排除できないとする。子居 2017 は、本篇に「上繩不失，政令刑罰」といった法家の影響が見られるとして、作者は清華簡『管仲』と同じグループであり、また「誠如」「好正」「敬信」「利身」「我主」「遺老」などの語が見えることから、その成立が戰國末期である可能性が高いとする。

清華簡は非發掘簡であるから、出土地に關する情報がなく、各篇の成立年代を嚴密には詰め難い。傳世文獻では戰國末期のものに見られる語があることは、子居 2017 のいうように本篇が戰國末期である可能性を示すことと、逆に



それらの語の出現年代が戦國前・中期に遡及することを示すことと、兩様に解し得る。ただ、趙平安 2017b がその書法について述べるように、本篇は清華簡『管仲』と書寫者が同一である可能性が高い。だがそのことや本篇に法家的表現が見られるからといって、本篇が『管仲』と同一集團の作者とすることも武斷の嫌いがある。ここは本篇に戦國期の傳世文獻に現れる表現が含まれることを指摘するにとどめるのが穩當なところであろう。

[参考]

清華簡『繫年』第六章

(釋文は、小寺敦 2016b: 135-420 による。)

晉獻公之婢妾曰驪姬，欲弑（其）子勳（奚）資（齊）之爲君也，乃譖（讒）大子龍（共）君而殺之，或譖（讒）（以上，第 31 號簡）惠公及文公。文公奔翟（狄），惠公奔于梁。獻公卒（卒），乃立勳（奚）資（齊）。弑（其）夫。里之克乃殺勳（奚）資（齊）（以上，第 32 號簡），而立弑（其）弟悼子，里之克或（又）殺悼子。秦穆公乃内（納）惠公于晉，惠公賂秦公曰，「我（以上，第 33 號簡）句（後）果内（入），凶（使）君涉河，至于梁城。」惠公既内（入），乃僂（背）秦公弗愛（予）。立六年，秦公銜（率）自（師）与（與）（以上，第 34 號簡）惠公戰（戰）于軌（韓），戡（捷）惠公以歸。惠公女（焉）以弑（其）子襄（懷）公爲執（質）于秦。秦穆公以弑（其）子妻之（以上，第 35 號簡）。文公十又二年居翟（狄，狄）甚善之，而弗能内（入）。乃适（適）齊。齊人善之。适（適）宋。宋人善之，亦莫（以上，第 36 號簡）之能内（入）。乃适（適）衛。衛人弗善。适（適）鄭。鄭人弗善。乃适（適）楚。襄（懷）公自秦逃歸，秦穆公乃召（召）（以上，第 37 號簡）文公於楚，凶（使）褒（襲）襄（懷）公之室。晉惠公卒（卒），襄（懷）公即立（位）。秦人起（起）自（師）以內文公于

晉<sub>二</sub>（晉。晉）人殺（以上，第38號簡）衰（懷）公而立文公，秦晉女（焉）<sub>一</sub> 𠂔（始）會好，穆（戮）力同心。二邦伐緡（都），逯（徙）之申（中）城，回（圉）商賔（密），戡（止）（以上，第39號簡）緡（申）公子義（儀）以歸<sub>一</sub>（以上，第40號簡）。

『左傳』僖公二十三年

他日，（秦穆）公享之。子犯曰，「吾不如衰之文也，請使衰從。」公子賦河水。公賦六月。趙衰曰，「重耳拜賜。」公子降，拜，稽首，公降一級而辭焉。衰曰，「君稱所以佐天子者命重耳，重耳敢不拜。」

『國語』晉語四

他日，秦伯將享公子，公子使子犯從。子犯曰，「吾不如衰之文也，請使衰從。」乃使子餘從。秦伯享公子如享國君之禮，子餘相如賓。卒事，秦伯謂其大夫曰，「爲禮而不終，恥也。中不勝貌，恥也。華而不實，恥也。不度而施，恥也。施而不濟，恥也。恥門不閉，不可以封。非此，用師則無所矣。二三子敬乎。」明日宴，秦伯賦采芣，子餘使公子降拜。秦伯降辭。子餘曰，「君以天子之命服命重耳，重耳敢有安志，敢不降拜。」成拜卒登，子餘使公子賦黍苗。子餘曰，「重耳之仰君也，若黍苗之仰陰雨也。若君實庇廕膏澤之，使能成嘉穀，薦在宗廟，君之力也。君若昭先君之榮，東行濟河，整師以復彊周室，重耳之望也。重耳若獲集德而歸載，使主晉民，成封國，其何實不從。君若恣志以用重耳，四方諸侯，其誰不惕惕以從命。」秦伯嘆曰，「是子將有焉，豈專在寡人乎。」秦伯賦鳩飛，公子賦河水。秦伯賦六月，子餘使公子降拜。秦伯降辭。子餘曰，「君稱所以佐天子匡王國者以命重耳，重耳敢有惰心，敢不從德。」

『史記』晉世家

重耳至秦，繆公以宗女五人妻重耳，故子圉妻與往。重耳不欲受，司空季子

曰，「其國且伐，況其故妻乎。且受以結秦親而求入，子乃拘小禮，忘大醜乎。」遂受。繆公大歡，與重耳飲。趙衰歌黍苗詩。繆公曰，「知子欲急反國矣。」趙衰與重耳下，再拜曰，「孤臣之仰君，如百穀之望時雨。」是時晉惠公十四年秋。惠公以九月卒，子圉立。

※ 本稿は、JSPS 科研費 18K00989 による研究成果である。

